

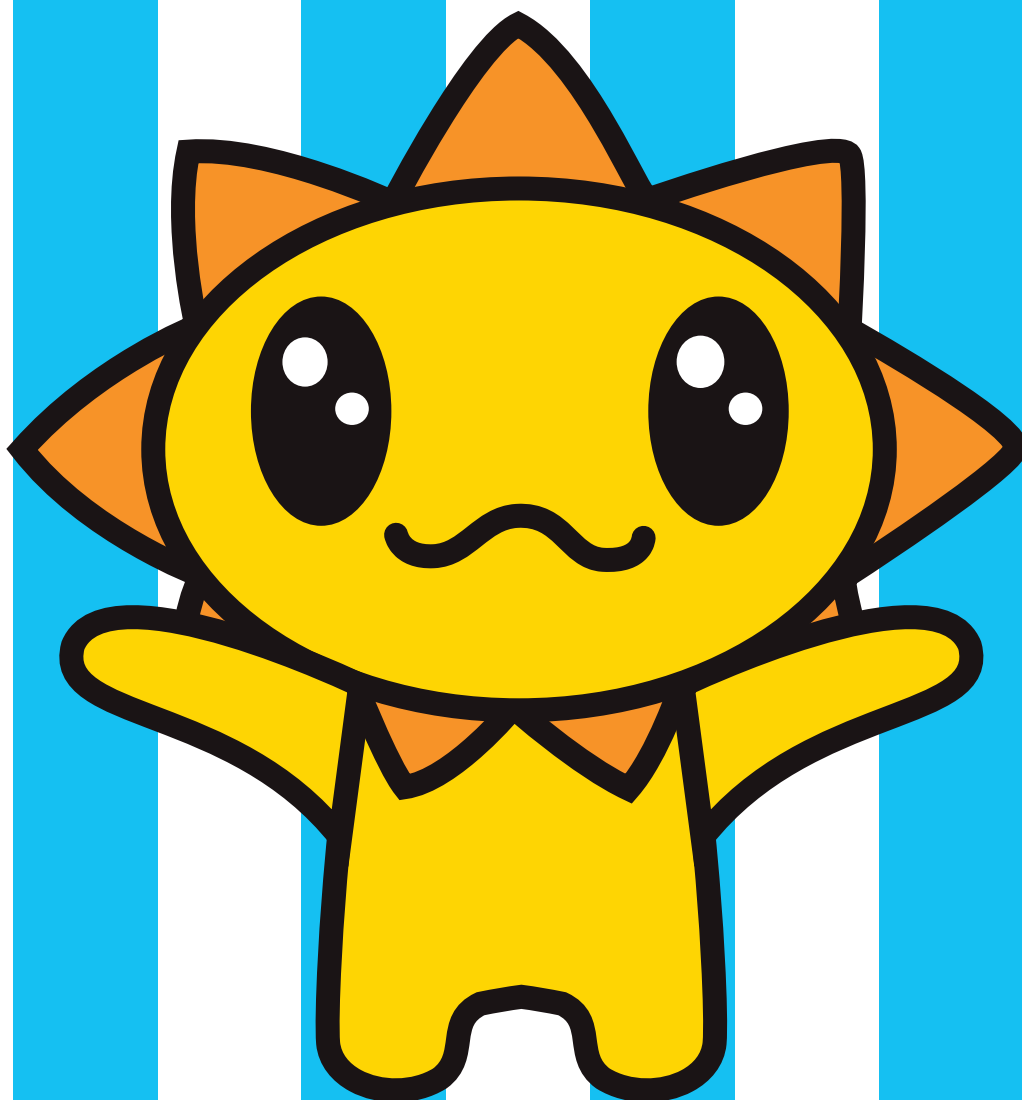
令和7年度  
入賞作品集



「少年の主張」中学生話し方大会



「家庭の日」に関する作文・図画



広島県の青少年のマスコット「ゆっぴー」

# 青少年育成の基本指針

(昭和52年6月1日青少年育成広島県民会議制定)

## 前 文

「青少年は日本の希望である」という言葉は、われわれの心を支えている標語である。ところが、青少年の非行が問題になると、明確な実施効果の見定めもつかぬままに、条例や法律の制定に期待の高まるのが実状である。しかし、青少年の非行が大人の生活の反映であるとすれば、青少年の健全育成は、大人の反省なしには実現しないであろう。大人がかつて青少年であったように、青少年はやがて大人になるのである。人間の生涯は、多様な価値観の個性的選択による自己教育の連続であるといえよう。

ここに制定された青少年育成の基本指針は、ただ青少年育成のあり方を抽象的に示したものに過ぎない。それは、各地域の実状に応じて具体化されることが期待される。総括的にいえば、資源の乏しさを克服して、相当高い生活水準に到達している現代日本において、青少年は将来どのような展望をもって進んだらよいか、これが最大の課題である。

われわれは、青少年の前途に幸福の「青い鳥」の夢を託したい。

## 青少年育成の基本指針

### (個人)

一 個性の独自性に対する自覚にもとづき、その価値可能性を錬磨し、生涯教育の基礎をつくる。

### (社会)

一 家庭の愛情にはぐくまれ、社会生活において、友情と連帯の意識を養う。

### (自然)

一 国土の自然を愛護するとともに、地域社会の文化を尊重し、環境の教育的整備につとめる。

### (世界)

一 諸民族の生活と文化を理解し、平和と親善の心をこめて、国際交流に寄与する。

### (総括)

一 日々の生活のなかに、生きがいを求めてわが道を行き、一隅を照らす光となる。







# 「少年の主張」・中学生話し方大会 2025

日時：令和7年9月6日（土）10：00～14：30

場所：広島県社会福祉会館（広島市南区比治山本町12-2）



集合写真



大会開始前の会場



審査委員・会場風景



主催者及び来賓登壇



表彰式の風景

## 発表者一覧



基準  
「土曜日の讚美歌」

広島市立国泰寺中学校  
1年 藤井 陽由



1番  
「言語の壁を  
乗り越えて」

三次市立甲奴中学校  
2年 松岡奈々子



2番  
「心があたたかく  
なるとき」

山陽女学園中等部  
3年 岩本 愛瑠



3番  
「ぼくもボランティアに  
なれる」

坂町立坂中学校  
1年 中村 縁宗



4番  
「救える命  
守れる笑顔」

三原市立第一中学校  
2年 森川 芽依



5番  
「私の心の第一歩」

尾道市立高西中学校  
1年 有馬 日和



6番  
「私たちの手で  
自然を守る」

広島県立広島中学校  
2年 奥田 祐



7番  
「おばあちゃん  
~あげたもの・もらったもの~」

広島市立瀬野川中学校  
3年 朝井咲明子



8番  
「僕の住む町を  
守っていく」

尾道市立御調中学校  
1年 国当 晃暉



9番  
「温かい環境づくり」

東広島市立八本松中学校  
3年 佐藤結衣奈



10番  
「『ありのまま』に  
輝く世界」

広島市立東原中学校  
2年 土井 心菜



11番  
「曾祖父の思い」

庄原市立口和中学校  
3年 本山 琉弥



12番  
「わたしの将来の夢」

尾道市立向島中学校  
2年 櫻武 優衣



13番  
「つながる温もり」

広島市立高取北中学校  
1年 長倉 朱音



14番  
「克服への第一歩」

呉市立宮原中学校  
3年 中元 桜愛



15番  
「挑戦することの  
大切さ」

竹原市立賀茂川中学校  
3年 中村 早那



## 克服への第一歩

呉市立宮原中学校

3年 中 元 桜 愛

周りと違うということは、時に大きな武器になり得ることがあります。しかし、学校という狭い世界では、己に刃を突き立てることもあるのです。

「アイツなんか変じゃない？ ねえ？」

「NO」とは言えない圧力のある言葉。その言葉に「NO」とも「YES」とも答えられない私は苦笑いをして誤魔化すのでした。

「どうしてそんなことで笑えるのだろう。」

違う意見を言えない環境、自己犠牲を躊躇する自分。それらは、私の頭の中に小さな違和感を少しずつ芽生えさせていきました。

学校で、地域の方々や保護者も参加する大きな催しがあったときのことです。この日、あのとき芽生えた違和感の正体を明らかにする鍵を見つけました。開始時刻まであと数分。会場が静かになりかけていたとき、突然、体育館に大きな奇声が響き渡りました。その奇声は、私の妹のものでした。私の瞳にクスクスと笑う姿が映ったとき、ふと、妹への好奇の目に対する不安をこぼした、母との約束を思い出しました。

「そんな人たちにはズバツと言っちゃるけえ！ 大丈夫、桜愛の心は強いんよ！」

自信を持ってそう言っていた私ですが、いざその場面に直面したとき、何も言うことができませんでした。悔しい…でも怖い。私は、彼らに声をかけることすらできなかったのです。妹は障がい者で、重度の知的障害と自閉症を持っています。15歳の私と3つしか変わらない妹は健常者と同じ見た目をしていますが、赤ちゃんのような言語能力で、異常にこだわりが強く、過敏です。しかし、それが私の大切な妹なのです。だからこそ、彼らに何も伝えられなかったのが悔しくてたまりませんでした。

そんな時、担任の先生に話し方大会に出てみないかと誘われました。チャンスだと思いました。筆を握り、言葉を振り絞ります。あの日の後悔を書こう。妹を題材にした作文は、不思議と思うように書けませんでした。考えれば考えるほど、書きたいことは真逆の感情があふれ出ます。「妹は、どうして笑われなければならないのか。」「これから先、私に自由はあるのだろうか。」「妹が健常者なら…」それ以上書き進めることができませんでした。しかし、何度も読み返して気が付いたのです。

「…環境じゃない、私が変わらなくてはいけないんだ。」

周りの目を気にして生きてきました。本当の気持ちを表に出さず、抑えつけてきました。あの日、「NO」と言えなかったこと、妹を笑う彼らと向き合えなかったこと。私自身の心の弱さが、環境や他人のせいにさせているのだと、この大会を通して気が付くことができました。もし、これを聞いているあなたにも何かわだかまりがあるのなら、一度吐き出してみてください。その小さな一言が自分の本心に気づき、未来を築くきっかけになるかもしれません。まだ、私も自分の心の弱さを克服する一歩を踏み出したばかりです。この先、様々な困難と出会うたびに、逃げだしたくなることもあるかもしれません。それでも、私は自分自身の心と戦います。その弱さに向き合いながら。

## 公益社団法人青少年育成広島県民会議会長賞



### おばあちゃん ～あげたもの・もらったもの～

広島市立瀬野川中学校

3年 朝井 咲明子

5月連休明けの終わりの学活で「今度の職場体験学習で、希望するところを第三希望まで書いてください。」私は真っ先に第一希望を書きました。それは『特別養護施設』

そこには自宅では日常の生活が難しい高齢者の方がたくさんおられました。初対面の私に笑顔で何回も同じことを話してくれました。「私のおばあちゃんもそうだったな。」小学5年生の時に肺がんと認知症をわずらったおばあちゃんはその2年後、介護が必要となりました。

自宅でのおばあちゃんの介護生活が始まりました。おばあちゃんに少しでも笑顔でいてもらいたい。それが家族の思いでした。

できるだけいっしょの空間を作りました。会話、テレビの音、生活音をともにするようにしました。母は率先しておばあちゃんを布団からリビングに誘い出しました。お茶をして、大好きな歌手のライブを観ました。私も帰宅後、おばあちゃんといっしょにテレビを観て、よく会話しました。おばあちゃんを静かな寂しいところに一人にさせなかったのです。

介護で、大変だけど大切なこと、それはお風呂です。体が思ったように動かせない人をお風呂に入れるのは想像以上に大変です。体を抱える力仕事は父です。体や髪を洗うのは父と母。そこでの会話はほめます。「はい、お湯かけるよ。」「湯槽ゆがねに入るけえ、足上げてね。」お風呂から上がったら、孫の私の出番です。水分補給と栄養補充の「青汁」を渡します。おばあちゃんはお風呂上がりの一杯を飲んで、すっきりした笑顔で、「ありがとう」「あー、幸せ」「極楽極楽」って手を合わせました。

お風呂ってすごい。私は毎日何気なく当たり前のように入っているけど…。お風呂から上がって、天使のような表情をするおばあちゃん。気持ちいいんだろうなあ。こうやってみんなに支えられて、お風呂に入るおばあちゃん。幸せなんだろうなあ。お風呂で体をきれいにする。衛生上、欠かせません。でもそれ以上に心があつたまるんだと思います。

私はおばあちゃんの介護を通じて、二つのことを実感しました。

一つ。私たち家族の思いはおばあちゃんに少しでも笑顔でいてもらいたいということです。だから無理なくできるだけ今の日常を大切にしました。支援が必要なところ以外はいつも通りを心がけました。おばあちゃんは自然と笑顔になりました。

もう一つ。以前は当たり前に通り過ぎていたことに幸せを感じられたのです。「おばあちゃん、〇〇ができた。」「デイサービスでこんなことをしたらいい。」こんなささいなことでも私たちの家族の心があたたかくなりました。そんな私たちの思いが伝わったのでしょうか。おばあちゃんは口癖のように「ありがとう」そして「笑顔」をたくさん見せてくれたのです。

介護は私たちにお互いの存在を再認識させてくれました。家族は大切。かけがえのないもの。そんなことはわかりきっていたつもりでした。しかしおばあちゃんの介護により、改めてそのことに気づいたのです。

私たちはおばあちゃんをめいっぱい介護しました。おばあちゃんは幸せだったと思います。私たちも負けなくらい幸せでした。

介護とは「幸せのキャッチボール」

そんな言葉が頭に浮かびました。



## 「ありのまま」に輝く世界

広島市立東原中学校

2年 土井 心 菜

皆さんは、今、生活している中で「本当の自分」を出せているでしょうか。自分の長所、短所、感情、夢。「ありのままの自分」を出せていますか。

私は最近、自分らしさについて、よく考えるようになりました。「今の自分は、本当の自分なのか」と。そう考えるようになったのは、幼い頃に描いた自分の絵を見てからです。

私は幼い頃から、絵を描くことが好きで、もらったノートに絵を描いては、親に見せていました。それが、小学校中学年頃から、友達に「このキャラクターを描いてほしい」と頼まれることが増えていき、気がつけば、既存のキャラクターのイラストの模写ばかりをしていました。しかし、これが、私が自分のイラストに悩むようになったきっかけとなります。

当時の私は、バーチャルユーチューバーに興味を持っていて、「動かなくてもいいから、自分だけのオリジナルのキャラクターが欲しい!」と思い立ちました。「じゃあ、描こう!」と鉛筆を握りしめ、いつものように机に向かいました。その時です。私は何を、どのように描けばいいのか、分からなくなりました。頭の中で、どのようなイメージにしたいか決めていたのに、そのモチーフをどうやってキャラクターのデザインに落としこめばいいのか、髪型、服装、ポーズ。描き出すために必要なことが、ほとんど思いつきませんでした。当時は、それがなぜなのか、全く分かりませんでした。今なら分かります。私が、誰かのイラストの真似ばかりしていたからです。そんなことも分からず、当時の私は、上手く描きたいが故に、ありとあらゆるものを調べては、そのデザインをイラストに組み合わせました。そして、出来上がったものは、「他人」のイラストをつぎはぎにしたものでした。自分で「いいな」と思って選んだ見本なのに、当然、そこには、私らしさはありません。そんな状態が続き、私は、絵を描くことが楽しいとは思えなくなり、自分が描きたい絵を見失っていました。

そして、中学1年の後期ごろ、私は幼い頃に絵を描いたノートを発見しました。懐かしく思い、ページを開くと、私は笑いよりも感動が先に立ちました。「こんなイラスト、今の自分には描けない」と。

首や腕はありえないほど長く、髪、顔、体はおかしな形をしていました。デザインなんて意識せず、好きなものを、思いつくままに描きまくっていました。私は、そのイラストを見て、「上手くなるために描いている」のではなく、「好きだから、好きなように描いている」ことを感じました。その絵は、確かに、当時の私にしか描けない、私の「ありのまま」を表現した絵でした。いつの間にか、私は、形ばかり上手く描くことにとらわれていたことに気がついたのです。ただ、上手な人の絵を真似ることは、悪いことばかりではありません。自分の技術を上げることに繋がります。技術を上げた後、それを自分の中で、どう生かすのか。それが、学びなのだと思います。

世界中には、環境や状況に恵まれず、私のように好きなことが学べない人がたくさんいます。SDGsの目標4である、「質の高い教育をみんなに」を学習した時、自分は恵まれた環境にいたのだと思いました。環境や偏見で、自分のできることの幅が狭められ、自由に好きなことが学べない人や、その一歩を踏み出せない人がたくさんいます。自分の好きなことを見つけて、楽しむこと。自分の苦手なことを見つけて、克服すること。学びとは、本当の自分を見つけるきっかけになるのではないのでしょうか。

私たちの中には、自分が未だ知り得ない「自分」が隠れているかもしれません。また、知っていても、その個性が発揮できていないかもしれません。誰もが環境に制限されず学びを得られ、その学びを通じ、自分への理解を深められるような世の中になっていくことを強く願っています。そして、みんなが個性を、ありのままを出して輝いていけたら、より有意義で、明るい社会になっていくと思います。そのために私は、友達や家族など、一人一人の考えや個性を尊重したり、相談などをされたらしっかり寄り添ったりなどしたいです。ありのままの姿を潰さず、また、少しでも個性の種が芽吹くように、自分にできる周りの人への心遣いを大切にしていきたいです。それと同時に、今よりも、もっと自分への見解を深め、自分らしさを出していけるよう、知識や経験の幅を広げていきたいと思っています。

## 国際ソロプチミスト広島会長賞



### 挑戦することの大切さ

竹原市立賀茂川中学校

3年 中村早那

皆さんは、どんな時に「後悔する」と思いますか？ 私は、全力で挑戦することができなかった時です。

中学生になって、先生方から挑戦することの大切さを教えてもらいました。しかし、分かっているのに挑戦することは難しく、失敗したらどうしようと不安になり、一步を踏み出すことができませんでした。自分の思いを言えなかったり、発表できなかったり、小さなことですが、後悔はどんどん積み重なっていきました。

そんな私の最初の挑戦は、昨年の「少年の主張」竹原市中学生話し方大会です。先生や先輩の後押しで行なった発表。本番までは、毎日とても緊張しました。しかし、不安がいっぱいの中、実際に人前でスピーチを行うと、頷きながら聞いてくださり、発表後には感想も頂いたことで、自分の思いが誰かに届いたんだということが分かり、やりとげたという達成感でいっぱいになりました。それから、私はいろいろなことに挑戦してみようと思うようになりました。

12月、生徒会役員選挙で評議委員長に立候補しました。立会演説会に向けて、原稿を暗記し、どこを強調したら聞いてくれる人に自分の思いが伝わるのか、何度も考えて練習しました。でも当日、もう一人の立候補者が堂々と発表している姿を見て、私は怖くなりました。私の番になり、演説を始めましたが、頭が真っ白になって原稿が思い出せず、途中から念のために持っていたカンペを見ながら発表してしまいました。

そして、投票の時。本当は自分に投票するはずなのに私はもう一人の立候補者に投票しました。自分が学校を引っ張ることができるのか不安になり、逃げたのです。数日後、生徒会役員発表の放送で、私の名前はありませんでした。けれど、私が練習していたことを知っていた友達や先輩から「私はあなたに入れたよ!」と声をかけてもらえたとき、とても嬉しかったです。たしかに私は落選しました。でも、周りの人は私の努力を認めて、温かい声をかけてくれたのです。挑戦してよかったと思いました。

その後、私は賀茂川中学校の一人の生徒として、「学校をより良くしたい」という気持ちを持ち、意見を出したり、行動したりしています。

5月にあった運動会では、運動会実行委員長として、活動しました。運動会を盛り上げるためにどうしたらいいか考え、ダンスでは1年生が踊れるようになるために、ダンスリーダーや先輩の意見を聞きながら行動していきました。運動会は大成功。競技もダンスもみんなずっと笑顔で、一生懸命でとても楽しい運動会になりました。保護者や来賓の方からも、みんなの頑張っている姿や楽しむ姿が伝わる運動会だったと言ってもらいました。実行委員長として努力してきたことが報われました。

私は、挑戦したときに得られる喜びと逃げた時に残る後悔、その両方を経験しました。その経験が、私を強くしてくれました。生徒会選挙で「逃げた」ことが、今の私を支える一番の経験になっています。だからこそ、「もうあんな思いはしたくない。」「今度こそ挑戦してみよう。」と思うようになりました。しかし、時には不安になったり迷ったりすることがあると思います。その自分の弱さを受け止め、葛藤しながら何度も挑戦し、逃げずに自分を信じて前に進んでいきたいです。だから、私は今、「少年の主張」という場に竹原市の代表で立っています。今でも発表は苦手です。また、頭の中が真っ白になったらどうしようと思うと、人前に立つのは怖いですが、でも、だからこそ、ここに立ちました。苦手な事から逃げず、挑戦する力を持ちたいから。

## 広島清流ライオンズクラブ会長賞



### つながる温もり

広島市立高取北中学校

1年 長倉 朱音

顔上げて そばにずっといるよ 私たちがいるよ 怖がらないで あなたの目に あなたの耳に あなたの手足になれるから 私たちを 思い出して 頼ってほしんだー。

これは、今年、金婚式をむかえた大好きな祖父母に、私が作詞作曲して贈った歌の一部です。私は小さいころから、祖父母の温もりをたっぷりと感じて大きくなりました。祖父は、元消防士で、とても強くてやさしい人です。私のために庭に鉄棒やすべり台、ぶらんこを作って、たくさん遊んでくれました。祖母は、料理や裁ほうがとても上手です。着物やゆかたを作ってくれたり、手作りのおやつを準備してくれたりしました。そして、二人の作る、無農薬の野菜を食べて、ここまで成長しました。

しかし、私が成長したということは、それだけ祖父母も年を重ねているということです。

数年前、一緒に、鳥取県の大山に登ったときの事です。山頂から下山し始めたその直後、祖母が手すりがあると思って手を伸ばした先には、体を支える物がなく、木道から数メートル下に落ちてしまったのです。背中骨を圧迫骨折した祖母は、今でも後遺症が残っています。

あんなにも元気だった祖父は、このままだと失明するかもしれないという目の病気にかかり、今年、手術をしました。術後、何日間もうつ伏せでねている姿を見て、胸が痛くて苦しくなりました。

私は、とにかく助けになりたいという一心で、身の回りのことをすぐに手伝おうとしていました。それは、祖父母の体が少し良くなってからも続けていました。

ある日、母が、

「どんな支え方がいいと思う。」

と聞いてきました。私は、迷うことなく、

「私ができることならなんだってやりたい。」

と答えました。すると母は、

「その気持ちも大切よね。ただ、それが相手にとって本当に必要なのかを考えてみたら。」

と言いました。私は、その意味がすぐには分かりませんでした。そこで、祖父母の様子をじっくり観察しました。すると、祖父母は、自分でできることが増えるように、少しずつ、少しずつがんばっていました。私は、「はっ」としました。何でもしてしまうことで、できるようになるチャンスを奪い、逆にできなくさせてしまっているのではないかと思ったからです。もしかすると、できないことが増えたという情けない気持ちにさせていたのかもしれない。

祖父母はよく、

「朱音ちゃんのために何かをしているときが一番幸せよ。」

と言ってくれます。しかし、近い将来、祖父母にも目が見えなくなるとき、体を動かさなくなるときがくるかもしれません。でも、「何もできない。」という悲しくてつらい気持ちではなく、「自分を必要としている人がいる。」という幸せな気持ちで、前むきに明るく過ごしてほしいです。

これからは、「私がやるよ。」ではなく、「一緒にやろう。」と言い、たくさんの「ありがとう。」を伝えていきたいです。

私が祖父母に贈った歌の最後にこうあります。

そばにいてだけで あなたから伝わる その温もりとやさしさに ありがとうとー。

## 優 秀 賞



### 救える命 守れる笑顔

三原市立第一中学校

2年 森川 芽 依

「献血にご協力お願いしまーす」

響き渡る一中生の声。その手に握られているのは、「救える命 守れる笑顔」と書かれた、イラスト付きの「のぼり」……。

私達一中生は、数年前から、献血を呼びかけるボランティア活動に取り組んでいます。私も1年生の時に、この活動に参加しました。小学生の頃、ショッピングセンターのところで活動していた一中の先輩方が、とてもかっこよかったので、私も入学したら参加したいと憧れていたのです。

私が担当したのは受付でした。通りかかる人に声をかけようとしても、緊張してなかなか声が出ません。何人もの人が、私の前を通り過ぎていきます。落ち込む私に先輩方は、「大丈夫だよ!」と優しく励ましてくださいました。その言葉に勇気をもらい、私も少しずつ大きな声が出せるようになりました。

献血に協力してくださったのは、ほとんどが以前にも献血したことがある方で、「また来ましたよ」と声をかけてくださいました。しかしそんな中、「初めてなんですけどいいですか?」と、受付を訪ねてこられた方。「どうぞ」と答えた私に、その方は、「これまで献血したことなかったんだけど、中学生が頑張っているのを見て、私も協力しようと思ったんよ」と言ってくださったのです。

「私達の活動は、人の心を動かしているんだ」

とても嬉しくて、とても感動したあの瞬間。今でもはっきり覚えています。そして、単なる憧れで始まった献血への協力呼びかけは、「また参加したい活動」へと変わったのです。そして、数年前から続いているこの活動が、代々の先輩方によって引き継がれ、今も続いているわけが分かったような気がしました。

一中の献血呼びかけボランティア活動が始まったのは、今から6年前。当時の3年生の先輩方が、授業で献血について学習して、血液不足の現状を知り、「何か私達にもできることはないか」と立ち上がったことがきっかけだったそうです。しかしそこには、先輩方が知らなかった背景……、コロナの影響で行事や大会がなくなったり簡略化されたりしたことで、たくさん辛い思いをした先輩方への先生方の思いがあったようなのです。

「生徒達に、大きな達成感を感じることが出来る何かをやらせてやりたい。献血の学習で現状を知れば、この子達はきっと何かしようと立ち上がるはずだ」

先生方の思いや信頼、それが一中の献血呼びかけボランティア活動へとつながる全ての始まりでした。そして、それに応えた先輩方の頑張りも、先生方の想像を超えました。活動に向けての標語を作り、「のぼり」までデザインして活動に臨み、献血への呼びかけは大成功を収めたそうです。

今も一中の玄関にはその「のぼり」が立ててあり、献血への呼びかけを行う時には、一中生は毎回、それを持って活動に臨んでいます。毎日見慣れている「のぼり」にこんな由来があることも、ボランティア活動の始まりのきっかけも、私は今回、この発表のために調べて初めて知りました。そして、一中生であることが誇らしくなりました。

「救える命 守れる笑顔」

私は、血液が集まれば、それを受け取る人の命が救えるしその人もその人の関係者も笑顔になるという意味だと思っていました。私の心のどこかには、「私達が笑顔を守ってあげるのだ」という気持ちがあったのでしょ。でも実際に活動してみて、笑顔になる人には協力してくださった方々も、呼びかけた私達も含まれるとわかりました。救える命を守ろうとする人々のつながりは、それに関わる全ての人の笑顔もつなげていくのです。

献血呼びかけボランティアを通じて、先輩方がつないできた笑顔のバトン。これから先も笑顔でつなげ、もっともつながりを広げていきたいです。

「救える命 守れる笑顔」

## 優 秀 賞



### 温かい環境づくり

東広島市立八本松中学校

3年 佐藤 結衣奈

みなさんは、障害と聞いてどのようなことを想像しますか。オリンピック等の影響により、車いすや目、耳の不自由な人などを思い浮かべる方が多いと思います。ですが、私は発達障害を思い浮かべます。なぜなら、私の大切な人が発達障害と診断され、療育を受けていたからです。療育とは、子供が社会的に自立して生活できるよう、個々に応じた支援を行って発達を促すことを言います。私は、その子が幼いときから、ずっと近くで関わってきました。その子は、思い通りにいかないと騒ぎ、ジャンケンで負けただけで泣き叫んだり、叩いたりすることがありました。そして、少しすると、その子は児童発達支援センターに通うようになりました。そのとき、初めて私の大切なその子が、周りの人々とは違うことを知りました。けれど、そんな事実を知ったからといって、知る前とは関係性が変わることはないし、その子の知らなかった部分が見えたようで嬉しい気持ちがありました。話を聞くと、発達障害は人によっては目に見えて分かるものではないことを知りました。例えば、車いすに乗っている人がいたら「あ、この方は足が不自由なんだ。」と誰もが、少なからず気づくはずです。もし、その車いすに乗っている人が階段の前において困っていたら周りの人は、「何か手伝いましょうか?」と声をかけると思います。しかし、発達障害をもつ人は見た目だけでは不自由さに気づいてもらいにくいのです。

月日が経ち、児童発達支援センターに通い出してしばらくすると、その子は驚くほど変化しました。ジャンケンで負けてしまっても「もう一回!」と怒ることがぐっと減りました。これは療育に携わってくれた先生方のおかげであり、何よりその子の頑張りが実を結んだのだと私は思いました。

ですが、順調に成長していく中で困った経験もありました。それは、その子が苦手な持久走大会の練習があったときです。練習でなかなか順位が上がらず、やる気を失いかけていることがありました。そのとき、その子が私に、「どうやったら速く走れるの? どうすればいいか分かんないよ!」と怒ってしまったのです。私は、不安を抱えながらも目標達成に向けて頑張ろうとしているのだと思いました。その子は、正解を求めて立ち止まったり、戻ったりして時間がかかってしまうだけだと気づいたのです。そこで、私は、「自分の前を走っている人を目標に、走ってみんさい!」とアドバイスをしてみました。試してみると、その子の順位は下がってしまったけれど、タイムを上げることができました。すると、「もっと速く走れるようになりたい!」と高みを目指すようになりました。このことから、成功体験を積み重ねて自信につなげていき、正解を導くまでの時間を短くしていく、という生き方があるのだと感じました。

これらの経験は私に、人によって様々なペースがあるなかでも、どんな人も目標に向かって努力していることを教えてくれました。だから、私も、目標に向かってくじけそうなときは、周りの人の助けを借りて協力してもらい、そして、助けを求められたら、その人の支えになれるような行動をしていきたいと思いました。傷つけるようなことをせず、支えてあげることで成長の糸口が見つかるはずです。

つまり、障害者や支える周りの人がもっと生きやすい社会にするためには、児童発達支援センターのような環境と、色んな人の考えや生き方を尊重できる「温かい環境」が必要なのだと思います。そうすれば、様々な人が自分らしく生きられる魅力的な社会になると思います。皆で温かい環境づくりをしていきましょう。



## わたしの将来の夢

尾道市立向島中学校

2年 櫻 武 優 衣

私は、以前から話すことにあまり自信がありません。授業で皆の前で話すことや、学級委員、行事のリーダーになることを避けてきました。それは、滑舌が良くないと自分で思い込んでいて、自分の思いがよく伝わるかどうか、不安だからです。昔から自信がないので、話す時も声が小さくなり、家族や友達、先生に聞き返されることも多くありました。私がまだ小さかった頃に見た、自分が話している動画に大きなショックを受けたことを今でもよく覚えています。動画の中の私の声は、何を話しているのか自分でもよく分からず、その時から自分の声に劣等感をもち始めました。その時から、自分が話している動画を見る時は耳をふさぎ、自分の声が聞こえないようにして見ることを自分の中でしていました。

5歳の時、私はいつも通り保育園に行き、先生や友達と話していました。その時突然、同級生の子が私に近寄って来て、「何て言ってるのかわからない。ちゃんとしゃべって。」と言ってきました。

私は本当に悲しくて、涙をこらえるのに必死でした。自分の滑舌や声あまり良くないことは自分の中で理解しているつもりでした。しかし、人から言われるとより重く心に響いてきました。そのことがきっかけで、自分の滑舌の悪さは何事にも置き換えられない事実となりました。その時以来、私は人に話すのが怖くなってしまい、人と話すことを拒んでいったため、自分の意見を伝えることが苦手になっていきました。

その当時、私は病院で話すリハビリをしていました。言語の先生が考えた文章と一緒に読んだり、発声の練習などをしていました。リハビリが終わった後も、もらったプリントを見ながら家で読む練習もしました。次のリハビリでほめてもらった時、私はすごくうれしかったし、ほめられることで自分の声に自信がもてていきました。リハビリを続けていったある時、もう発声についての問題はないと言われてもらえました。その時は、今までで一番うれしかったです。それから、自分に自信がついてきて、言葉を落ち着いてゆっくり話すことが、意識してできるようになっていきました。そして今は、話すことへのコンプレックスをほとんど克服して、自信をもって話せるようになってきています。

私には夢があります。それはどんな人にも寄り添える言語聴覚士になることです。

言語聴覚士になってやりたいことは二つあります。

一つ目は、話すことに問題がある人や聞くことに問題がある人それぞれに真剣に向き合っ、より良い生活ができるよう、一緒に問題を解決していくことです。

二つ目は、私のように「話し方」や「声」で困っている人がいるということ、たくさんの人に知ってもらう活動を自主的にすることです。このような環境にいる人がいることを知らない人の方が多いと思います。活動をすることで障害のある人や、障害がなくても困っている人に対して、もっと優しい環境になってほしいと思います。この活動が広がれば、言動によって傷つく人も減ってくると思います。

私は昔の経験から、目指す夢が決まりました。私の未来の動きから、一人でも苦しむ人が減ったらいいなと思っています。



## 言語の壁を乗り越えて

三次市立甲奴中学校

2年 松岡 奈々子

私は、外国の方とコミュニケーションをとって交流することに憧れています。そんな私の家はそのチャンスにあふれています。というのは、私の母が始めたWWOOF（ウーフ）という国際有機農業体験プログラムを通じて、私の家に外国の方がたくさんホームステイに来るからです。イギリス、フランス、中国、ニュージーランドなど、様々な国から来てくれます。このWWOOFの体験をする人たちは、ウーファーと呼ばれています。ほとんどのウーファーは英語が話せます。私はその国のことや、その人についてなど知りたいことがたくさんあります。仲良くなってたくさん質問をしてみたいです。しかし、「話が通じなかったらどうしよう」といつも不安に思ってしまう、そのときの空気が怖くなり、どうしても自分から話しかけることができません。

ところがある日、英語をほとんど知らない7才の妹が、ウーファーの一人に、「どんな食べ物が好き？」と堂々と日本語で話しかけていました。身振り手振りで話すうちに相手も質問の意味を理解して、「しゃぶしゃぶが好き」と答えが返ってきました。私は最近、英検3級に合格しました。少なくともまだ小学生の妹よりは英語が話せるはずです。なのに、英語をあまり知らない妹の方が通じ合っていて、私は話しかけることすらできませんでした。私はそんな堂々と話せる妹を羨ましく思いました。

こんなこともありました。私の住む甲奴町はアメリカのジョージア州アメリカス市との交流が盛んで、毎年小中学校にアメリカス市からの訪問団が来ます。今年もアメリカス市高校生が来てくれました。学校で、みんなで円になって給食を食べていたときの事です。会話のきっかけがなく、沈黙が続いていました。その中で担任の先生に「みんな話しかけてごらん」と言われました。私は話しかけられなかったのですが、クラスメイトが不安そうにしながらも「Do you like anime?」と質問しました。高校生は「Yes. I like anime. Jujutsu Kaisen! (呪術廻戦)」と嬉しそうに答えてくれました。

それまで私は、英語を上手に話せないと外国の方とのコミュニケーションをとるのは難しいと思っていました。

しかし、日本語で積極的に話しかける妹や自分の知っている英語を使ってコミュニケーションをとろうとするクラスメイトの姿を見て、「外国の方と話すときに大切なのは、英語力よりも、その人と積極的に話そうとすることなのではないか」「好きな食べ物、共通の興味など、簡単な話題でもいいから、そこから会話を広げていくことで通じ合えるのではないか」と思うようになりました。

そんな私にも「通じた」と思えた瞬間がありました。我が家で、フランス人のウーファーさんとボードゲームをしていた時です。ゲームが盛り上がりみんな興奮していました。私は、気づいたら、ゲームのルールを説明するため、「Japan, around, jump できる!」（カードの裏に日本地図があったら道が繋がってなくてもジャンプできる、という意味）と日本語混じりで言っていました。彼は「OK!」とわかってくれました。自分から話しかけて話が通じたと思えたのはこのゲームのときが初めてでした。お互いがゲームを楽しんでいたのだから、通じるはずだ、と信じて話しかけることができました。

コミュニケーションで大切なのは、「言葉」が正確に通じることではなく、「思い」が相手に伝わることなのだと思います。私は今でも英語で上手に話しかけることはできません。でも、相手との共通点を探したり、日本語を交えてでもとりあえず話しかけてみたりすることで、言葉はうまく通じなくても、心を通じ合わせる会話ができます。言語の壁を乗り越えて、心で通じ合えるコミュニケーションを私は大切にしたいです。



## 心があたたかくなるとき

山陽女学園中等部

3年 岩本 愛 瑠

「幸せとは星が降る夜と眩しい朝が繰り返すようなものじゃなく大切な人に降りかかった雨に傘を差せることだ」

これは、私の大好きなback numberさんの「瞬き」という楽曲のワンフレーズです。このフレーズに出会ったことがきっかけで、「幸せ」について深く考えるようになりました。

皆さんは、どんなときに「幸せ」を感じますか。私は美味しいもの、特にお菓子やケーキなどの甘いものを食べたときに「幸せ」だなと感じます。平和学習や曲の歌詞でも「幸せ」という言葉はたくさん使われますが、そもそも「幸せ」とはどういうことなのでしょう。辞書には「めぐりあわせがよいこと」とありますが、なかなかピンとこない気がしませんか。私は、「幸せ」とはこういうこと、というように一つの決まった答えがある訳ではなく、自分自身で自分なりの答えを見つけるものだと考えました。

私自身、これが私にとっての「幸せ」だとはっきり言えるほどの答えはまだ見つかっていません。しかし、当たり前のように目を向けてみると、友達とくだらない話で笑い合ったときや、かけてくれた優しい言葉で心が軽くなったときなどの何気ない瞬間に心があたたかくなることがあります。それは、テストで良い点を取ったとか、何かを手に入れたからではなく、誰かと心が通じ合ったとき、一言に救われたとき。そんな心が動いた瞬間に「幸せ」は生まれているような気がします。

友達がこんなことを言っていました。

「幸せは、あるかないかではなく、感じられるかどうか。」

私はこの言葉に深く納得しました。私たちは日々の中で、つい誰かと自分を比べてしまったり、足りないものばかりに目を向けてしまったりします。しかし、本当の「幸せ」は、特別な出来事や成果では得ることのできない、誰かと心がつながったときに感じる、小さなぬくもりのようなものかもしれません。

実際に、ハーバード大学では1938年から80年以上にわたって、人はどうすれば幸せに生きられるのかを調査する研究が続けられてきました。そしてその結論は「人とのよい関係こそが人生を幸せにする最も大きな要素である」というものでした。つまり、どれだけお金があっても、地位や成功があっても、人とのつながりがなければ心からの「幸せ」は感じられないということです。

だから私は、まだ自分にとっての「幸せ」は見つけれられていないけれど、これからも大切な人たちと心を通わせながら、少しずつ見つけていけたらいいなと思っています。そして、今この瞬間を皆さんと一緒に過ごせていることも、私にとって一つの「幸せ」です。

## 優良賞



### ぼくもボランティアになれる

坂町立坂中学校

1年 中村 縁 宗

ぼくの周りにはボランティア仲間がたくさんいます。ぼくはその仲間たちと11月29日から12月2日まで石川県能登半島災害支援に参加しました。

ぼくが石川県能登半島災害支援に参加した理由は、平成30年西日本豪雨災害の時の経験があったからです。自分の住む坂町は大きな被害がありました。その時、いろいろな県から来てくれた人たちがたくさん復旧作業を手伝ってくれました。そのおかげで災害復旧がとても早く進み、笑顔のパワーももらいました。だから今度は自分達が能登の人たちに笑顔のパワーを届けて、少しでも復旧の手伝いをしたいと思いました。能登半島への移動は車で片道11時間もかかりました。その間ぼくの心の中はずっとドキドキハラハラしていました。とても緊張しながら石川県へ向かいました。

現地に着いて、早速地震の被害にあった家の床下の泥出しやブラッシングなどの作業を手伝いました。最初はあまり話せていなかったお家の人ともだんだん打ち解けていき、話をしながら作業が出来ました。作業が終わると、その家の人に、「これでこれから家をどうするのか選択肢が増えたよ。ありがとう。ありがとう。」と言ってもらえて、とてもやりがいを感じました。

2日目は、石川県の人に揚げもみじを作って配付したり、クリスマスオーナメント作りを一緒に楽しみました。参加してくれた人たちは、「元気が出たよ。災害があってからこんなふうにならなくなったり話したりすることがなくなっていたんだ。」

と言っていました。また、ある若いお兄さんは、あまり外に出ることができなくなった90才のおばあちゃんに揚げもみじとオーナメントを作って持って行ってあげていました。ぼくもその人みたいに思いやりのある大人になりたいと思いました。

3日目はとうとう帰る日です。帰る前に被害の大きかった場所を実際に見に行きました。最近あまりテレビで放送されていないけど、火事で焼けた家や壊れた酒屋さんのタンクなどがそのままありました。ある酒屋さんは、残った店舗でなんとかお酒の販売を続けていました。広島や北海道の酒蔵が復旧に協力してくれたおかげで販売できているそうです。

ぼくは今回、たくさんの人たちに、ありがとうやおいしかった、うれしいなどの感謝の言葉をかけてもらいました。小学生のぼくにでも誰かのために役に立てる事があるのだと実感することができました。力もまだ強くない上に、知識も無いぼくだけど、ぼくにしかできないことがあるのだと思いました。

ぼくにとってボランティアとは、助け合う事と人を笑顔にすること、そして自分も楽しむことです。ぼくにだってできることがあります。みんなにだって誰にだってできることがあると思います。一番大切なことは、無関心にならないことだと思います。



## 私の心の第一歩

尾道市立高西中学校

1年 有馬 日和

「皆さんは、人を助けたこと、また助けられたことはありませんか。どんな些細なことでもいいです。その些細なことが人をハッピーにさせています。」これは、私の好きな本に書いてあった言葉です。

私は、よく父に叱られていました。ですが、私の友達に優しくトーンを変えて挨拶する父の姿を見て、私は「家ではあんなに怒っているのに…」と外では優しくなる父を少し嫌いになりました。

私が小学6年生の休日のときです。家族全員で買い物に行ったとき、小さな子供の靴が片方だけ落ちていました。私は、それを見て見ぬふりをして買い物を続けようと思いました。ですが父は、その靴にまっすぐに歩いていき、その靴と同じ靴を履いた子供を探し始めました。幸い、同じ靴を片方だけ履いた子は近くにいる、見つかりましたが、心の中では、持ち主の人が気づいて拾えばいいのに、別に父が拾わなくていいのに、と思いました。そして、思わず「あんなことできないや」と父に言いました。すると父は少し怒ったような顔で「今のは当たり前のことだ」と、私に向かって、まっすぐな目で言いました。私は驚き、一瞬足を止めました。

それから何か月もたったある日、今度は、母と姉と買い物に行きました。母がトイレに行っている間、私は姉としばらく辺りを歩き回っていると、あのときと同じように、小さな子供の靴が片方だけ落ちていました。私は父との出来事を思い出しましたが、周りにはたくさん人がいて、靴を拾う勇気がありませんでした。そんな私の様子に気づいた姉が、スッと靴を拾い、あたりを探し始めました。私は、姉に隠れてあたりをキョロキョロしながら、靴を片方だけ履いた子を探すことしかできませんでした。すると、遠くに靴を探している親御さんがいました。私はすかさず、小さな声で「あそこ」と姉を呼び、姉に隠れながら、靴を渡してもらいました。私がホッとしていると、姉が「見つけたなら自分で拾ったら？」と、ジッと私を見つめながら言いました。私はモジモジしながら言い訳をいうことしかできませんでした。トイレから帰ってきた母に、姉がこのことを説明しました。母は私に「ご飯食べに行こっか」とだけ、優しく言ってくれました。そんな母の様子に、なにか言われるのではないかと不安になっていた私は、戸惑いました。レストランに入り、3人で食べたい物を選んでみると、隣の席のおばあちゃんのメニューがテーブルの下に入って取りにくそうになっていました。「当たり前のことだ」と言った父の真剣な顔、「自分で拾ったら？」と言った姉のまっすぐな目が思い浮かびました。拾うか迷っていた私は母の「取ってあげたら？」という言葉に背中を押され、テーブルの下に落ちたメニューを優しく拾いました。すると、おばあちゃんは笑顔で「ありがとう」と優しく言ってくれました。私は清々しい気持ちになり、思わず笑顔になりました。そんな私を見て、母と姉は「成長したね。」「良かったじゃん。」と褒めてくれました。家に帰って、そのことを父に話すと、少し嬉しそうに笑顔で「すごいじゃん。」といてくれました。みんなが笑顔になった瞬間でした。

皆さんも、同じような経験をしたことはありませんか。今まで周りの目や緊張で、できなかったことが、ある日、勇気を出してみればできたこと。私は、そんなことに挑戦しようとしている人がいたら、笑顔で「頑張れ」と背中をトンとおして、その人の新たな進化の瞬間を優しく見届けてあげられるような人になりたいと思います。



## 私たちの手で自然を守る

広島県立広島中学校

2年 奥田 祐

下校中の私の目に、悲しそうに泣くカラスの群れと、土がむき出しになっている森が映りました。家の近くにあった森が切られ、家が建てられることになったのです。以前、社会の授業で、リゾート開発のために、熱帯雨林などが壊されていると習ったことがあります。よくないと感じてはいましたが、あまり実感はありませんでした。しかし実際に人の手によって壊されていく自然を見たことで、自然破壊の問題について、もっと自分事として考えなければと思うようになりました。

自然には他では感じるこのできない感動を与えてくれます。

水をたっぷりと含んだ深い緑色のコケが生えた倒木や岩。その間を勢いよく流れる、透き通ったきらびやかな水。ともに日向ぼっこをする猿と鹿。千年以上も前から地球に生きている、どしりと大地を踏み締めている屋久杉。

去年、私は屋久島に登り、自然の美しさ、力強さ、尊さを感じました。動物も植物も、太陽や水の恵みを受け、ともに生きていました。人間も、自然の中の一員なのです。しかし、人間は自然を壊そうとしています。人間も、動物も、虫たちもみんなが住みやすい世界にしていくために、私たちに何ができるでしょうか。

今年の春、私はカナダへ語学研修に行きました。

「Nature is beautiful and it helps us feel calm」

「自然はとても美しく、わたしたちを癒してくれる」

ホストファミリーの言葉です。壮大に広がる、草原。湖や山。彼らは身の回りの自然を大切に、愛していました。そして私を、沢山の素敵な場所へ案内してくれました。

日本に帰国してから、ふと家の庭に目をやると、いつの間にか、チューリップやフリージアがほのかな甘い香りとともに咲き誇っています。そういえばいつも、庭は家の中から眺めるだけだな、庭の中にはどんな生き物がいるんだろう、もっと植物を見てみたいと思い、外に出てみました。菜の花には、蝶の卵やアブラムシがついています。木をじっと見つめると、アリが行列を作っています。小さな庭の中でも、きちんと生き物たちの世界があるんだ、と気づきました。

今、地球環境に関する様々なことが問題になっています。豪雨や干ばつ、暑すぎる夏。人間の未来はどんどん苦しいものになってきています。でもそれは、人間が自然を壊してしまったから。今もそれが続いています。

これは地球規模の問題です。人間の便利の追求が、問題の解決を困難なものにしています。でも私は「地球を守りたい」という理想を持ち続け、その理想を原動力に、社会に貢献できる大人になりたいです。

「小さな光、集いあい、大きな未来に繋げていこう。」

これは、私の学校の校歌の一節です。今までどんな生き物たちも共に支え合い、美しい自然をつくり、私たちを生かしてくれました。足元だけでなく、いつもその先を見据えながら行動する。未来を背負う私たちが声を上げ、大切な自然、そして地球を守っていきます。

## 優良賞



### 僕の住む町を守っていく

尾道市立御調中学校

1年 国 当 晃 暉

僕の家は山の中にあります。家もまばらで住んでいる人のほとんどが高齢者です。最近では一人暮らしが難しくなったために、老人ホームに入っている高齢者が増え、空き家も多くなりました。通学途中で人に会うより、動物に会う方が多いほどです。

僕が小さい頃は、まだ米作りをしている家が数軒あったけれど、今は作る人がいなくて草が生い茂っていたり、イノシシに土を掘り起こされていたりと、田んぼが荒れてしまっています。

その中でも、80歳を超える僕の祖父は、米作りを続けています。米を作るには、田んぼが荒れないように、一年中周りの草刈りをしたり、動物が入ってこないように電気柵で囲ったり、テープを張ったりしています。田植え前には田んぼを耕し、苗を植えてからは毎日水の調整をするなど大変な苦勞があります。僕は保育園の頃から田植えや稲刈りを父と一緒に手伝っています。今年は、田植え前の肥料まきを母と手伝いました。10キログラムある肥料を背中に担いで、田んぼの周りを歩いてまいていきます。僕も背負ってみたけど、とても重くて、「何年もおじいちゃん達はがんばってきたんだなあ」と思いました。祖父もどんどん年をとっていくので、僕たちが少しずつ引き継いでいかななくてはならないなと思いました。僕が手伝っていると、「晃暉が頑張ってくってくれるんじゃない」と祖父がうれしそうに言っていました。

当たり前のように、祖父にお米をもらって食べていたけれど、祖父を手伝ってみてお米ができるまでには田んぼの準備や毎日の水の管理などがあり、とても大変だということがわかりました。

現在、米不足が問題になっています。以前祖父から、米作りには色々な農機具が必要で苗や肥料代等を考えると、米を買う方が安くつくのだと聞いたことがあります。これも、米作りをする人が減っている原因の一つだと思います。米がない、値段が高いことばかりに注目が集まっているけれど、これを機に米作りの大変さや、作る人がいなくて田んぼが荒れてしまっている現状も知ってほしいです。

僕の家周りには、山と田んぼしかなくて友達と遊びたくても自転車で何十分もかけて行かないといけないところだけど、空気は澄んでいるし、鳥や動物の鳴き声が聞こえてきます。自然豊かなこの場所が僕は好きです。

高齢化が進んでいるのは、僕が住んでいる地域だけではなく、御調町全体も同じです。

この自然豊かな町を、みんなで守っていく必要があると思います。大きなことはできないけれど、僕にできることから少しずつ始めていきたいと思っています。まずは、祖父が今まで守ってくれた米作りを僕や父が引き継いでいこうと思います。また、総合的な学習の時間などで御調町の魅力を再見したり、学習したりして、自分たちの育った御調町の良いところを伝えていきたいです。そして、僕と同じように考えてくれる人が、少しずつでも増えていくようにしていきます。

## 優良賞



### 曾祖父の思い

庄原市立口和中学校

3年 本山 琉 弥

私には頼もしくあこがれの背中があります。私の家は四世代で生活しています。小さい頃からひいおじいちゃんと過ごし、たくさんのことを教えてもらいました。良いときはたくさんほめてくれ、ダメな時はダメと伝えてくれます。愛情たっぷりのひいおじいちゃんのことを私は大好きです。

そんなひいおじいちゃんも今年で88歳、米寿を迎えました。病院に行く回数が増え、疲れからため息をつくことも増えました。最近は「もうなごうないけえ」という言葉を口にすることもあります。ずっと一緒にいられるわけではないと感じてから私にできることは何かと考えました。ひいおじいちゃんはいつも畑仕事や田んぼの仕事に精をだしていました。今は体がつらいこともあり、おじいちゃんやお父さんが主に作業をしています。ひいおじいちゃんは田んぼや畑に対する思いが強く、作業をしなくても指示を出したり、田んぼの様子を自分の目で確認したりしています。昔は会社にも勤めており忙しい中でも田んぼの仕事は欠かしたことがなかったそうです。私は小さなころから手伝いをしていてみんなのために飲み物を買ったり、刈り取った稲を乾燥機に入れたりしています。田植え機に乗せてもらったこともあります。そして毎年秋になると収穫したおいしい新米を食べることができます。世代を超えて力を合わせて作った米はおいしいし、自分が手伝ったというやりがいもあります。いつかは3人のように田んぼを継いで引っ張っていくのだろうと何となくは思っていました。が、はっきりとした自覚や実感はもてずにいました。そんなある日、ひいおじいちゃんが大きなトラクターを買ってくれました。ひいおじいちゃんは機械を扱うのが上手なので今でも30年前のトラクターが元気に仕事をしてくれています。それにも関わらず、私たちのために買ってくれました。その背中には「後のことはたのんだ」と言っているように思えました。ひいおじいちゃんの農業に対する思いを受けて絶対に途絶えさせたくない、米作りを継ぎたいという気持ちになりました。

米作りには田おこしから収穫まで複雑な工程と膨大な仕事量があります。米の重量や肥料の量などの知識、重い物を持ち上げる力、農機具を長生きさせるための適度な手入れが必要です。また天気の確認や水の調整などは機械ではできないため手作業で行うこととなります。これらの仕事をいままでひいおじいちゃんを中心となって行ってきました。しかし最近は高齢化したこともあり、家族全員で分担するようになりました。たくさんを知ること、一人ではできない大変な作業だと実感しました。それと同時にこれまで米作りを引っ張ってくれていたひいおじいちゃんや家族のみんなを誇らしく思いました。私もひいおじいちゃんのような存在になりたいと思っています。

今までひいおじいちゃんには、たくさんを教えてもらい、支えてもらいました。ひいおじいちゃんに限らず、家族みんなに伝えることです。これからも我が家で大人数のにぎやかな田植えが続くといいなと思っています。だからこそひいおじいちゃんにはまだまだ長生きをしてほしいし、たくさんを教わりたいです。この思いがひいおじいちゃん、そして家族みんなに届くといいなと思います。

## 基準特別賞



### 土曜日の讃美歌

広島市立国泰寺中学校

1年 藤井 陽 由

皆さん、一日の中で、心がふっと軽くなる瞬間はありますか？  
暖かな日差しを感じたとき、友達との何気ない会話に笑ったとき、ふとした拍子に、心の重さが少しだけほどける、そんな経験はないでしょうか。

私にとって、その瞬間は毎週土曜の教会にあります。

週末の朝、少しひんやりとした空気の中を歩きながら向かう教会。門をくぐると、どこか懐かしい香りがして、自然と肩の力が抜けていきます。私がこの教会に通い始めたのは小学生になったばかりの頃です。あれから7年も経ちました。ここはずっと変わらず、私をあたたかく迎えてくれる大切な場所です。

とても落ち着くことができる場所なので、どれだけ人間関係で悩み、苦しくても教会には、毎週わくわくしながら通っています。

小学校を卒業してから、お世話になった先生たちになかなか会えなくなりました。だけど、教会では、変わらぬ笑顔で「元気だった?」「最近の学校は楽しい?」と声をかけてくれるのです。その瞬間、昔の楽しかった思い出がよみがえり、胸がじんわりとあたたかくなります。

教会では、静かな礼拝から始まります。人の温もりを感じる礼拝堂で、みんなで讃美歌を口ずさむと、不思議と心が落ち着いていきます。牧師先生の語る言葉はいつも優しく、時にユーモアも交えながら、私たちに大切な気づきを与えてくれます。牧師先生のお話や讃美歌は私にとって癒しの一つです。

まるで、小学生の頃に戻ったような懐かしい安心感に包まれ、自分をゆったりと見つめ直すことができるのです。礼拝が終わると、もう一つの楽しみがやってきます。それは、うどんタイムと呼ばれている時間です。湯気が立ちのぼるうどんを、みんなで囲んで食べる時間は、まさに至福のひとつです。たくさんの人たちに囲まれて、静か過ぎず、にぎやか過ぎず、小さな子供たちの楽しそうな声が聞こえると、心が落ち着きます。先生たちも、最近の学校での出来事や、生徒とのちょっとしたやりとりを楽しそうに話してくれます。

「昨日の放課後は、〇〇くんが教室で走り回っていて大変だったのよ」といった、思わず笑ってしまうようなお話にも、皆で声をあげて笑ってしまいます。その会話の中で私は、まるで自分も先生の一員になったような気持ちになって、不安や疲れがふっと消えていくのを感じます。私が悩んでいるときは、先生たちは親身になって、話を聞いてくれます。

たとえば、人間関係で上手くいかなかったとき、先生たちは経験をもとに、助言をしてくれます。すると、私にはなかった選択肢が広がって、「そうすればいいのか」というように気持ちが前向きになります。このように自分の思いを言葉にすることで、悩みを解決することがたくさんあると思います。

私がいつも救われている言葉の一つに、

「どんなことがあっても、希望を持って喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」という言葉があります。笑顔で前を向いていけるような生き方ができたら素敵だと思います。私はきっと、この教会という場所で、その姿勢を自然と学んできたのだと思います。

うまくいかない日や、自分に自信が持てない時でも、この場所に来れば、

「私は大丈夫。誰かが私を見守ってくれている」そんな実感が、私の心の支えになっているのです。皆さんにも、心から安心できる時間や居場所があると思います。

もし、まだ見つかっていなくても、きっとそれはどこかにあって、ある日ふと出会えるはずですよ。私はこれからも、この「希望を持って喜ぶこと」を大切にしながら、自分のペースで前に進んでいきたいと思っています。

私が大人になったら、誰かにとっての「安心できる場所」を作れるような存在になりたいなと思っています。それが、私にとっての新しい大きな夢です。

最後に、皆さんへ。たとえ辛い日や悩みが重なるときでも、自分自身が心から安心できる場所、それから、時間を見つけることが大切です。私が教会で授かる温もりのように、皆さんもそれぞれの心の居場所を見つけ、そこから新たな力や笑顔を生み出してほしいと願っています。



## 審査員長

比治山大学非常勤講師

和田 晋

審査員会を代表して私から全体的なことについて講評を申し上げたいと思います。

まず今日発表してくださいました16名の皆さん、本当にお疲れ様でした。例年3,000人くらいの応募ですが、今年は4,200人を上回っています。それだけたくさんの応募総数の中で16人に選ばれるだけでも素晴らしいことです。まずは本当に勇気をもって、この会にチャレンジしていただいたこと、そして今日堂々と発表を終えられた皆さんに対して心から労いの拍手を送りたいと思います。発表者の皆さんに拍手を送りましょう。

これから審査の内容について皆さんにお伝えしたいと思っています。

最初に基準発表していただきました国泰寺中学校の藤井さんは1年生です。堂々たる発表でしたね。自分が思うことを丁寧に相手意識に立って分かりやすく伝えていただいた点で基準発表としてふさわしく素晴らしい発表だったと評価しております。その基準発表のおかげで、あと15名の1年生から3年生までの皆さんが堂々と落ち着いて発表ができたと思っております。基準発表の大切さは最初に基準というものがしっかりしているとその後の発表自体にメリハリが出てきますし、評価する上でもきちんと良いところが見えてきます。

15名の発表された皆さんの内容について具体的に触れさせていただきます。皆さんご存知のように、審査員会は「論旨つまり論理性」と「表現力・話し方」の二つの柱で評価を行いました。

まず皆さんが良かった点を申し上げます。自分に相応しく相手にわかりやすい、自然なしゃべり方で伝えようとしたことです。その言葉は表情豊かで声にまで表情がある、そのような発表もありました。

皆さんが今日の発表に対して、どれほど普段から準備をされ、この一回だけの勝負にかけられたかという思いが強く伝わってきました。しかも今年は1年生、2年生が積極的に発表していただきました。審査員として心強く思います。

二つ目に話題の内容が自分の身近な内容が多かったことです。例年、世界の平和、戦争、いじめというような、大きなテーマがよくこの会では扱われてきました。逆に言いますと、今年の大会は小ぶりのテーマで発表者の視野が狭いのかとも思いがちですが、そうではないと審査員は評価しております。身近なこと、身近な体験、それに基づいた言葉は力があり強い。自分の実感を上手に日常生活や家族関係の中で、具体的に考え抜いたことをわかりやすく伝えていただいた、これが評価点として審査員会では審査員の様々な言葉に表れておりました。

特に審査員がうれしいという声が出されましたのは、「この会をステップにして自分の弱さを克服し、自分を変えていきたい」、こういう発表が15名の中に3名もありました。この会が存在する意義もよくわかりますし、今後に大いに期待したいと思います。今日の発表が自己採点ではどうかはわかりませんが、この会を経験したことによって、これからの自分を作っていただきたい。審査員としては心からそのことを願っております。

厳しくなるかもしれませんが、課題点を申し上げます。今後の皆さんに期待するからこそその審査員の厳しい「愛の鞭」だと思ってください。

一つ目、発表のタイトルについてです。去年の講評でも触れましたが、あまりにもタイトルが簡単で安易すぎることです。これまで「小説を書くように全文を仕上げ、原稿を書き上げてから最後に自分が聴衆に訴えたいタイトルを考えてください。」とお伝えし、今年こそはと期待していました。発表タイトルの一覧を見て、「もう少し工夫ができないだろうか」と率直に感じました。

一例を申し上げます。発表した中に「ありのままに輝く世界」というタイトルがありました。このタイトルを見たときに、「ありのままに輝く、どういうことだろう。」と私自身はそのタイトルに引き付けられましたし、

今日の発表にも強い関心を持ちました。本屋で本が並んでいるのを見たときに、そのタイトルから自分が読もうか手にしようかで選ぶと思います。話し方の発表も一緒です。自分の日記を披露するわけではなく、皆に伝えたいことがあるから皆さんはここに集っているのです。また、聞きたい人たちがいるから、ここに集うのです。そうだとしたら「何を伝えようか」ということを短い言葉ですが、もっと工夫したタイトルで勝負をしていただきたい。今後の注意点として審査員から出た意見を改めてお伝えしました。

二つ目、発表つまり話し方によって結果に大きな差異がでてくるのは非常に残念なことです。論旨は予備審査をクリアした方々ですからそれぞれに個性があり素晴らしいものです。そうだとすると、この一回限りで伝えようとしたときに自分の表情を含めた話し方がどれほど左右するか、ということをもっと慎重に考えていただきたい。歌が入っていたり、身振りが入っていたり、握りこぶしがあったり、また両手を閉じたり、色々な動作がこの演台で披露されました。私が思うには、それらは自然な動作として表れているかどうかが大切です。歌にしても自分の論旨からこれが自然なものとして表現されたかどうかなのです。審査員会で、この論議は長い時間をかけて意見交換をいたしました。そのような言葉以外の表現をどう評価するかということが一つのポイントになりました。

この広島県の話し方大会の中で大事にしてきたことは、相手意識に立った自然な伝え方です。その伝え方が自分にとってベストであるというものを選び抜いていただきたいのです。「全国大会のビデオを見たら身振り手振りで入れとったよ、だから自分もそれをする」という安易な発表は避けていただきたい。何よりも自分らしさと個性を大事にした自然な発表をしていただきたい。これが審査員全員からの願いであります。

もう一つ、論理の展開がやや甘いことです。今年の発表の特徴は、個人的なエピソードが多かったですね。「私の家族ではこういうことがありました、こんなふうに関わり合いました」ということなどです。もちろん、この具体的なエピソードを伝えることによって共感も進みます。でも、この会というのは自分の家族や日記のように伝えることが趣旨ではありません。集まってきた皆さん、あるいは全国大会につながる審査用ビデオをも撮っていただきましたね。全国大会へのステップアップとして、この人は自分の体験・思いをベースに何を伝えたいのかが大きなポイントになります。「伝えること」と「伝わること」は違います。繰り返しますが「伝えること」と「伝わること」は違うのです。相手意識に立ったしっかりした話し方というものをもう一度再考してください。わかりやすく言えばエピソードがあってもいいのです。でも最後に自分が「何をこそ皆さんに伝えたいのか」ということを自分で論理化し、しっかりまとめていただきたい。審査員席に座って聴いていて「ああ内容がある良い発表だな」と感動しているところに、あっという間に発表が終わってしまう。実にもったいない発表ですね。自分が思うことをまとめて聴衆に強く訴えることをもっと工夫していただけたら良いと思います。

講評のまとめとしてお伝えしたいことは、今日の16名の皆さんの発表は感性の宝庫であったことです。その感性が豊かであるがゆえにそれぞれの言葉に力がありました。ただ気を付けてください。感性というのは独りよがりにもなりがちです。感性を正しく持つためには想像力を常に持つことが重要です。1枚の絵、一つの言葉、一つの風景、そこから想像力をしっかり持って自分の豊かな言葉を作りあげてください。今日の発表者16名の皆さんなら必ずできます。その自信を持って皆さんの今後の課題としていただきたいのです。

結びに、審査員の中からこういう声が出たことをお伝えいたします。今年は被爆80周年、平和課題、被爆者の話、そのような発表が必ずあるであろうという期待もありました。結果的にはそのような発表はありませんでした。「だからだめだ」と言っているわけではありません。皆さんに今後、今日自分が体験したことを基に、世界に発信できることは何なのかということをもっと学び続けていただきたいと願います。私見ですが、広島は被爆しまさに「怒りの広島」からスタートしたと思いますが、今は違うと思います。「祈りの広島」になっています。その祈りの広島を継承するために、多くの人や、この会で育った皆さんの先輩方が一生懸命世界に広島や平和を発信し続けています。それはこの会の、また私自身の誇りでもあります。皆さんの今後に心から期待をいたします。自分がその広島の代表者として世界に何かを祈りを込めて伝えていきたいと思う自分を磨いて頂けたらと思っております。今日この会にご参加いただいた大人の皆さんにお願いいたします。今日発表してくださった子どもたちの声は私たち大人こそが心に刻むべきことだと思います。ぜひこの子どもたちを守り育て、そして応援し続けていってください。本当に簡略であります。私の講評とさせていただきます。ありがとうございました。

(以上)

# 「少年の主張」・中学生話し方大会2025

## 第47回「少年の主張」広島県大会開催要領 第59回中学生話し方広島大会開催要領

- 1 趣 旨 国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子供たちには、論理的に物事を考える力、自分の主張を正しく伝える力、広い視野と柔軟な発想や創造性などを身につけることが求められている。  
この大会は、中学生が話すことによって伝える力を育み、学び合う機会となるとともに、意見発表を通して、中学生への理解と認識を深めてもらうことをねらいとする。
- 2 対 象 広島県内の中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟  
独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 4 協 賛 国際ソロプチミスト広島、広島清流ライオンズクラブ、  
公益財団法人広島青少年文化センター
- 5 後 援 広島県、広島県教育委員会、広島市、広島市教育委員会、広島県公立中学校長会、  
広島県私立中学高等学校協会校長会、中国新聞社、NHK広島放送局、中国放送、  
広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送
- 6 開催日時 令和7年9月6日（土）10：00～14：30
- 7 日 程 9：30～10：00 受付  
10：00～10：15 開会行事  
10：15～12：30 発表  
12：30～13：30 昼食  
「少年の主張」全国大会のDVD上映  
13：30～14：30 審査発表、表彰、閉会行事
- 8 開催場所 広島県社会福祉会館 2階 講堂（広島市南区比治山本町12-2）

（注）諸事情によっては、日程及び運営等を変更する場合があります。

- 9 発表内容 次のA、B、Cの中から、日ごろ心に思っていること、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由にユニークな発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。  
なお、未発表、自作のものに限ります。  
また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。  
A 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。  
B 家庭、学校生活、社会（地域活動）または、身の回りや友だちとの関わりなど。

C テレビや新聞などで報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

- 10 発表 小道具は、使用しない。  
**発表時間は5分程度**（400字詰め原稿用紙4枚程度）  
ただし、6分を超えるものは審査対象外となりますので、ご注意ください。
- 11 応募方法 申込書に原稿を添えて、中学校長を經由して提出する（原稿は返却しない）。  
ただし、市町、青少年育成市町民会議等の類似の大会で入賞した中学生の応募も可とする。  
この場合、市町等においてその旨を付記して、市町等から提出するものとする。  
原稿は原則**400字詰め原稿用紙（A4判縦書き）を使用すること**。（学校等で使用されるB4判縦書きも可とする。）  
生成AI等を利用して作文の原案を作成したり、自作の作文を推こうするなどということは行わないこと。
- 12 申込締切 **令和7年8月1日（金）必着**
- 13 事前選考 提出された原稿を主催者において審査し、大会出場者を決定する。なお、大会の出場資格を得た者については、各中学校長等あてに8月中旬に通知する。
- 14 審査 審査は、学識経験者、マスコミ関係者、関係行政機関の職員、（公社）青少年育成広島県民会議及び広島県中学校話し方連盟並びに協賛団体の代表者によって構成する審査会で行う。
- 15 表彰 広島県知事賞、（公社）青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞（各1名）、優秀賞（若干名）及び優良賞を選考し賞状を贈る。
- 16 副賞 この大会で、広島県知事賞、（公社）青少年育成広島県民会議会長賞、広島県中学校話し方連盟会長賞、広島清流ライオンズクラブ会長賞、国際ソロプチミスト広島会長賞を受賞した5名には、副賞として海外研修が（公財）広島青少年文化センターから授与される。  
時 期：令和8年夏休期間の5日間（予定）  
訪問先：大韓民国（予定）
- 17 その他 この大会で、広島県知事賞を受賞した者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張」全国大会（11月16日（日）東京で開催）への出場候補者として推薦する。
- 18 問い合わせ先 公益社団法人青少年育成広島県民会議「少年の主張」係  
〒730-8511 広島市中区基町10-52（広島県環境県民局県民活動課内）  
電話 082-513-2742 ファクス 082-511-2173

## 審査員及び審査基準

### 1 審査員

審査員長	和田	晋	比治山大学非常勤講師
審査員	石原	剛	広島市教育委員会指導第二課指導主事
//	江種	則貴	公益社団法人青少年育成広島県民会議副会長
//	加納	優	中国新聞社論説委員
//	佐伯	美香	広島県環境県民局県民活動課長
//	定野	和広	広島清流ライオンズクラブ副会長
//	樽谷	和子	公益財団法人広島青少年文化センター 理事
//	土方	康	NHKチーフ・アナウンサー
//	藤本	恵	広島県中学校話し方連盟顧問
//	山田	聖美	国際ソロプチミスト広島会長
//	横岡	洋子	広島県教育委員会義務教育指導課指導主事

(五十音順、敬称略)

### 2 審査の基準

概ね次の点を採点ポイントとし、内容、論旨、表現、態度等総合的に評価を行う。

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか。  
(柔軟な発想に基づく意見や提言、未来への希望や夢・メッセージ、新しい情報や視点など)
- ② 具体的な内容とともに、一般性・社会性の広がりがあるか。
- ③ 提案や提言を実現・実践する意欲や積極性が感じられるか。
- ④ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- ⑤ 発表に熱意が感じられ、迫力があるか。
- ⑥ 主張の内容が感銘と共感を与えているか。
- ⑦ 説得力のある話し方であるか。
- ⑧ 発表の早さや間のおき方、姿勢が適当であるか。

# 内閣総理大臣賞 受賞作品

## 伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校

3年 谷 口 鉄 馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっておめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だ」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのお金をしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうにお金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学1年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。

「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

## 「家庭の日」に関する作文・図画

特選

### せんたく物にはひみつがいっぱい

三原市立糸崎小学校

3年 岡野真拓

ぼくが3年生になって、家族みんなでいっしょの時間がすごく少なくなってしまいました。ぼくのお父さんは、仕事で大きかにたんしんふにんになって1か月に1回しかあえません。いつもいっしょだった3番目のお姉ちゃんは、中学生になって、今までみたいにずっといっしょではなくなりました。二人のお姉ちゃんも部活をがんばっていて、ぼくが起きた時には、もう家にいないこともあります。帰ってくるのもくらくなってからです。お母さんも、お父さんがたんしんふにんになってからいつもいそがしそうです。

ぼくは、家にいても一人ぼっちの気がしてさみしくなりました。ぼくは、お母さんに「みんなでおでかけしたいな。」と言いました。お母さんが、「ごめんね。でも今日は、めずらしくみんな家にいるから力を合わせて家のことをしよっか。」と言いました。お出かけしないと聞いてさいしょはがっかりしました。でも、やってみると楽しくて発見がたくさんありました。

お母さんは、そうじリーダーで気づきそうじ係です。お父さんは、元気いっぱいだからにわの草ぬき係です。二人のお姉ちゃんは、へやのかたづけ係です。ぼくと3番目のお姉ちゃんは、力を合わせてせんたく物ほし係です。みんなで一どにそうじをするので、家の中があっという間にぴかぴかになりました。きれいになると心もすっきりしてみんなえ顔になりました。

ぼくとお姉ちゃんですんたく物ほしをしていると、お姉ちゃんのバスケットボールのふくが6枚もあるのに気づきました。一人3まいずつ二人で6まいです。ぼくやお母さんのふくは1まいだけです。たった1日なのに3枚もあるのは、あせをかいて何回もきがえたからです。お姉ちゃんたちは、すごくがんばっているんだなと思いながらハンガーにかけてパンパンとたたいてしわをのばしました。お父さんのシャツをほした時やっぱりお父さんのは大きいなと思いました。ぼくがきるとスカートみたいです。3番目のお姉ちゃんのせいふくと体そうふくの同じところには、ひっかかってできたきずがありました。

「楽きのサックスをふいていたら、ふくにひっかかってしまうんよ。」と教えてくれました。がんばっていてすごいなと思いました。ぼくは、せんたく物には、家族のひみつがいっぱいかくれていて宝さがしをしているみたいでした。みんなで遊園地に行ったのと同じくらいわくわくしていつの間にか心がぼかぼかになっていました。

ぼくは、一人ぼっちでさみしいと思っていたけど、お父さんもお母さんもお姉ちゃんたちもみんながんばっているんだと分かってうれしい気持ちになりました。もうさみしくなんてないよ。だってみんなの心はつながっているから。

広島市立井口小学校

5年 落合 新

ぼくの家は4人家族です。わが家には、毎朝やっている、家族だけのひみつの習かんがあります。それは、「今日も」「一日」「元気に」「がんばるぞー」と、4人順番にかけ声をかけることです。かけ声の後、全員で「おー!」と元気よく声を出しています。

かけ声の順番がループするように決まっているので、だれから始めても最後までまようことなく声を出すことができます。

去年、弟が小学校に入学してからしばらくして、朝「学校に行きたくない」と言う日がふえてきました。理由は分からないけど、なんだか元気が出ないことがあったみたいでした。

そんな時、お母さんが「よし! がんばってみよう!」と声をかけているのを聞いて、ぼくはそれをみんなで言ってみたらどうだろう?と思いました。試しに順番に声を出してみたら、始めはうまく声が合いませんでしたが、だんだん息が合ってきて、きれいにそろうととても気持ち良かったです。

今では毎朝必ず誰かが「今日も」と大きなかけ声を出すところから一日が始まります。なんとなくやる気が出ない時も、まだねむたいなと思う時も、「おー!」と声を合わせると、元気スイッチが入るような気がします。

最近では二人で「今日も」を言うバージョンや、一日の最後に「がんばったね!」「おつかれ様!」と声をかけ合うバージョンも作ってみました。新しいバージョンを始める時はすぐにはうまくいけないけれど、みんなで協力してゲームをクリアしているような気持ちになれます。

もしこれから家族がふえたら、こんな風にセリフをふやして、5人でも6人でも続けたいと思います。

平日は、ぼくと弟は学校。お父さんとお母さんは仕事。毎日、楽しいこともあるけれど、そうではないこともたくさんあります。声かけをする時は「がんばっているのはぼくだけじゃなくて、家族みんななんだ。」そう思うと、ぼくたちはただ家族だけじゃなくて、いっしょにたたかう仲間みたいな気持ちになれている気がします。

他にも、やる気がない時はギュッと10秒ハグをして、じゅうでんすることもやっています。ちょっとはずかしいけど、家族はぼくにパワーをくれるそんざいです。

これからも、誰かが元気がない時は、ぼくがそっ先して声をかけたり、ギュッとしてパワーをあげたりしていきたいです。

北広島町立豊平学園

8年 原 田 唯

私は今年の7月にある決心をしました。

私の家庭は家族6人でした。

「でした。」と過去形になっているのは、今年の7月に父が亡くなったからです。

私の父は、とにかく人を笑わせることが大好きな人でした。友達が家に遊びに来たらなぜか父も一緒に遊んだり、友達が帰る時にお菓子ではなく、豆腐をあげて友達を笑わせていました。

そんな父が私の授業参観に来た時、私の友達が後ろを向くと、父は授業中にもかかわらずピースをしたり、こっそり手を振ったりして友達を笑顔にしていました。なので授業参観後、友達は私に「手を振ってくれた。」と喜んで言いに来ます。私は正直恥ずかしかったけれど、周りの友達から愛された父の姿を見て、嬉しくもありました。また父は無類の社会科好きで、特に地理や歴史に関わることとなると、喋りだしたら止まらない人でした。家族で旅行に行ってもテーマパークで遊びたい私達の気持ちはそっちのけで、お城や資料館など、自分の興味のあるところに私達を連れて行きました。また、うっかり質問でもしようものなら話を2倍も3倍も大きくしてしまう人でした。社会科の知識をたくさん持っている父は、私の社会の勉強をクイズ形式などで全て教えてくれました。

そんな父は私が小学3年生の頃がんになって、入退院を繰り返していました。しかし家族は、父の病名を知らされておらず退院するたびに元気になって帰る父を見て、回復に向かっていていると思っていました。後から分かったのですが、父が私達家族に病名を教えなかったのは、最後まで私達家族と普通に生活したかったからだそうです。

病気の進行が止められない中、父は一つも悲しい顔をせず自分にできることを楽しそうにやっていました。

その一つが、私達に勉強を教えることでした。どの教科も教えてくれるのですが、社会科に対する熱意は他とは違い、教科書を片手に問題を出してくれたり、私の質問に答えてくれたりしました。また、私が社会について言ったことが正解だったら「さすが。」と大げさに褒めてくれました。

そして私が中学2年生になる頃でした。父の体は段々と弱っているようでしたが、地域のことも、私達の勉強のことも1ミリも手を抜きませんでした。私は父の思いに応えようと勉強を必死に頑張り、驚かせてやろうと思いました。一学期の期末テストで今まで以上の結果を出すことができ、父に報告すると「やっと伸びてきたね。」と褒めてくれました。そんな矢先、とうとう父は食事を取ることが難しくなり、入院をすることになりました。それでも父はまた家に帰って、私達の成績を見ることを楽しみにしていました。私も病院へ見舞いに行っは、「夏休み成績を見せに来るからね。」と言いました。しかし、入院してわずか三日後に父は静かに息を引き取りました。

父は私達に遺言のような手紙は結局残さず、いつも通りの父のまま旅立ちました。

しかし唯一残してくれたものがあります。それは父が社会科の教科書を見て大事なところを全て問題にしてくれた、約300枚のスライドです。私はこれを宝物と思って、大切に使っています。

父が亡くなり、自分にとって忘れないようにしているのは「私は、父の後継者なんだ。」という言葉です。私は、父の後継者だと思うと天国から見ている父も喜ぶのではないかと思います。私達家族は5人になっても、これまで以上に、にぎやかで笑顔あふれる家庭を築いていきたいです。

そして、父に誇りに思ってもらえるような自分になりたいと、決心しました。

東広島市立西条小学校

1年 砂 岡 壱 紀

「おろちをつくってみたい。」

こどもかぐらたいけんきょうしつのかえりみちにおとうさんにいいました。

ぼくは、さんさいのころにはじめてかぐらのおろちをみました。はじめてみたときは、こわくておかあさんのうしろにかくれてないていました。でも、なんかいもかぐらをみにいって、くねくねとうごくおろち、くちからひをふくおろち、がぶりとかみついてきそうなおろち、ぜんぶかっこよくて、おろちのことがだいすきになりました。

「いいよ。いっしょにつくってみようや。」

とおとうさんはいってくれました。ぼくは、おろちをどうやってつくったらいいのかなとおもい、どうがでおろちのつくりかたをしらべました。

まず、おろちをつくるざいりょうをあつめました。たけひごをつかっておろちのからだをつくろうとしたけれど、ぜんぶおれしました。できなくて、こまりました。おとうさんが、

「おろちをつくるこうぼうにおしえてもらいにいってみようか。」

といってくれて、かぞくでしまねけんにいきました。

こうぼうでは、かぐらのいしょうやおろちのからだをつくっていました。ぼくはこうぼうのおにいさんに、つくりかたをきこうとしました。でも、ひとりできくのはどきどきしたので、おにいちゃんについてきてもらいました。おにいさんは、いろんなことをおしえてくれました。

「おろちのからだをつくるには、たけをたくさんつけて、からだをきゅうこつくらないといけないよ。」

ときいて、ぼくはびっくりしました。でも、どうしてもつくりたいから、おにいさんにそうだんしました。

「たけはおもいからべつのものにして、からだは、わしじゃなくてぬのでいいかもね。」

とおしえてくれました。つぎのひ、ざいりょうをおかあさんとかいにいきました。いいものがないか、たくさんさがしました。

おろちのあたまは、はこにしました。えのぐどうぐをつかえるのがうれしかったです。おろちのからだは、わかかにしてくねくねさせるのがむずかしかったです。はりといとでぬうのもむずかしくて、じかんがいっぱいかかりました。ときどき、おとうさんとおかあさんにてつだってもらいながら、がんばってつくりました。かぞくでつくったおろちは、やっぱりかっこいいなとおもいました。

おぼんやすみ。おうちにしんせきがあつまりました。ぼくは、みんなにみてもらいたくて、おろちをもってうごかしました。みんなびっくりしていました。これがかぐらだんのひともみてもらいたいです。

広島市立千田小学校

1年 中原 千晴

わたしは、おにいちゃんとなかよしです。がっこうに行くときや、ほうかごなど、いつもいっしょにこうどうしています。わたしがしょうがっこう1ねんせいになってからは、ようちえんせいのとくとくらべてすこしずつきょうだいのかんけいがかわってきたようにかんじたので、それはなにがどのようにかわったのかかんがえてみました。

たとえば、わたしがようちえんときは、おにいちゃんがくつをはかせてくれたり、つぎのひのもちものをよういしてくれたりしました。でも、わたしがしょうがくせいになったいまは、おにいちゃんが気づかないことをわたしがおぼえてちゅういしてあげることもふえました。おにいちゃんはそんなとき「えらいぞちいちゃん」とほめてくれます。おにいちゃんにほめられると、うれしいきもちでいっぱいになります。

ほかにも、おにいちゃんたんじょうびのひおにいちゃんがほしがっていた、おもちゃをわたしのおこづかいでかってあげました。なぜかというまへのわたしのたんじょうびのひ、おにいちゃんがわたしのためにじしゃくとポリぶくろでくふうしてつくったパラシュートのおもちゃをつくってくれたのです。わたしは、そのことをずっとおぼえていたのです。おにいちゃんになにかやってくれたらわたしもおかえしになにかしてあげたくなります。

わたしがちいさいときは、おにいちゃんがなにかしてくれることがあたりまえだったけれど、わたしがすこしずつおおきくなったいまは、おたがいにたすけあうきょうだいになったとおもいました。

そしてわたしとおにいちゃんは、きもちときもちがつながっています。わたしの「は」がわるくなったとき、「かわいそう」といっていました。わたしよりさきになんかなくなってしまうおにいちゃんは、とてもやさしくおもいやりがあります。これからもこまったときは、おたがいちからをあわせてたすけあいます。

三原市立糸崎小学校

2年 川根 遥人

ぼくのいもうとは、4さいです。いつも、けんかもするけど、大すきです。よく、いもうとのすきな人ぎょうをカメラで、

「はいいきます。」

と言って、とっています。すると、いもうとは、

「かわって。わたしもとりたい。」

といっしょにあそんでいます。二人であそぶのもとてもたのしいけど、あきの、10月には、おかあさんの、おなかから赤ちゃんがうまれるよていです。

赤ちゃんは、男の子のよていなので、いもうととちがって、モノレールやトミカであそべるとたのしみです。早く大きくなって、あそべるように、まずは、生まれてからは、ミルクを作ったのませてあげたり、よろこびそうな、おもちゃであそんであげたいです。赤ちゃんは、小さなおもちゃを口の中に入れたら、あぶないので、今のうちからいもうとに、

「小さいおもちゃはかたづけよ。」

と、教えてかたづけのれんしゅうをしています。

おかあさんのおなかは、どんどん大きくなっています。みんなで名前を考えたりしています。ぼくは、長い名前がいいと思っているけどまだきまっていません。どんな名前になるかたのしみです。

ぼくは、いもうとと、おとうとの二人に、よろこんでもらえるような、やさしいおにいちゃんになれるように、がんばりたいです。また、算数でならった1Lの牛にゆうパックを、おつかいでかってきました。今、おかあさんのおなかには、1Lくらいの赤ちゃんがいるそうです。3Lくらいになったら会えるそうなのでおもたそうだとおもいました。おもたいにもつは、いっしょにはこんであげたいです。

竹原市立竹原西小学校

3年 水野里咲

わたしは、5人の家族がいます。父、母、私、妹、弟です。わたしの家族は、仲よしで楽しい家族です。わたしの家族の仲よしエピソードをしょうかいします。

一つ目は休日にお出かけしたときのことです。休みの日はどこに行きたいか、家族で行きさきを考えます。ショッピングモールに行ったときは、自分も楽しくて、妹や、弟に、やさしくでき、仲よくできます。私がやさしくできると、弟や妹も言うことを聞いてくれます。また、いっしょに出かけると、私がほしいものをいっしょに、家族みんなでえらんでくれます。一人でえらぶと気づけない商品のとくちょうが分かり、なっとくして、物がえらべます。買い物の帰りの車の中では、今日の楽しかったことを話して、もりあがります。家につくと、みんなで買った物を見かえすのも、楽しい時間です。とくに私は、買った物で妹と家でお店やさんごっこをするのが大すきな時間です。この時は妹と仲よくできます。妹はお店やさんごっこが上手で、私にアイデアをくれます。二つ目の仲よしエピソードは、家族みんなでゲームをすることです。平日の早くじゅんぴができた日や、休みの日に、カードゲームやすごろく、テレビゲームをして、楽しみます。私は強いのでよくかってしまうのですが、なぜか私だけかっててもおもしろくありません。まけたらくやしいけどみんなにもかってほしいと思います。いつもまけている妹がかたたときは、みんなでよろこびます。また妹や弟がまけがつづくと、ぐずってしまうときは、手かげんをしてあげます。それは、私がかちたいという気持ちよりも、みんなで楽しくゲームをしたい気持ちが強いからです。父はあまりゲームをしないので私がルールをせつ明します。人にせつ明するのは、むずかしく、まちがったルールでやってしまい、みんなで大わらいするときがよくあります。三つ目のエピソードは、家の大そうじするときのことです。お友だちが来るときや、年まつのお休みなどに家族ときょうりょくして、リビングにちらかったおもちゃなどをかたづけます。子どもたちの仕事は、ゆかふき、ロボットそうじきのおせわ、まどふきなどです。自分だけではたのしくないそうじがみんなでやると楽しくなります。またつまらないと感じている、まどふきも妹がたのしそうにやっていると、自分もやりたくなるので妹は、楽しくするのが、上手だなと思います。

このように、家族とすごす時間が私は大すきです。この時間をふやすために私ができる事は、おてつだいや妹、弟のめんどうを見ることだと思います。つい、なまけてしまいますができるだけお手つだいをしたいと思います。また、この作文を書いて、家族のことを考えたときに自分が家族の気持ちを考えて、行動していることに気づきました。これからも大すきな家族のことを大切にしようと思いました。

竹原市立竹原西小学校

4年 松木天聖

6月のある日、サッカーの練習のあと、めずらしく父と母が二人でむかえにきた。

なんだかいつもと違った感じ…なんでだろう…。父が言った。「レオがたおれて入院した。急いで病院に行くぞ。」ぼくはびっくりしたあとに信じられない気持ちとかなしみにあふれた。病院につくまであせりとドキドキする気持ちではりさけそうになった。ケージでくだにつながれて、ぐったりしているレオを見たら、ぼくはあまりのしょうげきにぼうぜんとした。もっとレオと遊びたい…もっとレオをだっこしたい…どうか助かってほしい…どうか冷たくならないでいつまでも温かいままでいてほしい。ねたきりになっても生きてほしいとねがった。ぼくはかなしみにくれないながら一日をすごした。いつもいっしょにねるレオが、いまでも病院のケージで、一人でたたかっているのだと思うとつらかった。

ぼくは、なかなかねつけず、ふとんの中で母に背なかを向け、声をださないようになみだをながした。

よく朝、ぼくは、学校を休みたいと母に伝えただけで、「レオも生きようとひっしにがんばっているから、天聖もがんばっておいで。」と言われて、ぼくはつらいけどがんばって学校に行った。夕方見まいに行くことをはげみに…。

学校からかえると、姉が教えてくれた。

レオが意識をとりもどし夜にはたい院できると聞いた。ぼくは安心して気力がわいてきた。

夕方、サッカーの練習へ行く前に、一目だけレオに会いに行った。夕べ見たレオとはちがい、たたかいに勝ったレオを見てなんだかほめてあげたい気持ちになった。こちらにくるレオを見てうれしさがたちこめた。

ぼくはレオから力をもらいサッカーの練習をがんばれた。練習から帰ったらレオに会える。今夜からまた、レオといっしょにふとんでねることができる。だっこもできるし、いっしょに遊ぶこともできる。このようなことができるようになったと思うと、とても楽しみになった。

じょじょにもとのレオにもどってきた。レオの命が助かったことに、心からかんしゃした。

レオは3年前に、祖父が亡くなった日からぼくらの家族になった。レオは、なん病と、とうによつ病という二つの病をもち、それは、治らない病気だから毎朝の薬と朝晩の注射とオムツ交かんがかかせない。

そんな日じょうのかいでも、ぼくら家族にはありがたいと思えるようになった。

8月26日に15才をむかえるレオ。

いつまでも元気でぼくらをいやしてくれるあたたかなホットドッグでいてほしいとねがう。わが家にこのレオがいることでできるしあわせな日々がいつまでもつづきますように。

東広島市立西条小学校

5年 片平 帆 香

私は、この夏休みに空手の全国大会に出場しました。全国大会と聞くと「すごいね！」

と言われることが多いけれど、そこにたどりつくまでにはたくさんの努力と家族の支えがありました。

大会に出場するために帯の色が足りない私は、しん査を受け、強化練習にも参加、そして、日々のけい古と自主練習。ほんとうは、出場をやめたいほどしんどかったです。でも、両親が私のために、なんどもなんども熱く言ってくれました。

「行けばなにかが変わるから。」

と。

そして、8月になり大会が鹿児島で行われるため、広島から長い道のりを家族全員で車で移動しました。遠い場所での大会ということもあり、じゅんぴも大変です。でも両親は

「せっかくのチャンスなんだから、楽しい大会にしておいで！」

と明るくせ中を押してくれました。

大会当日、私はとてもきんちょうしていました。何度も私の様子をたいき場所にみにくる母、そんな、私よりきんちょうする母を見てきんちょうしながらも自然と笑顔が出てリラックスできました。いつもと変わらない父ニコニコ笑ってがんばれよ！と送り出してくれました。弟はいつもと変わらずベンチでおしゃべり。こんな弟には努力が必要なことを私のがんばりで伝えるという思いでした。

お母さんが口パクでなにか言ってます。

「大丈夫だよ！ やってきたことはでる！」

と声は聞こえませんでした。そう言ってるように思いました。あとから聞いたら

「大丈夫？ 水分ほきゅう！」

と全然ちがいましたが。

試合中、ふと目をやると、応えん席から私を見つめている両親のすがたが見えました。まっすぐ私を応えんしてくれるすがたで気持ちが落ち着き、

「よし！ やってやろう!!」

と思うことができました。

結果は、ベスト32。目標の1回戦とっばはもちろん、3回戦まで進むことができました。私は悔しいという気持ち、そして、何かが変わるからと言われたあの言葉の通り、大きな成長となるけいけんになりました。そして、私だけでなく家族みんなでつかんだ結果だとその時思いました。

帰り道、両親は

「よくがんばったね。」

「かっこよかった。」

と何度も声をかけてくれました。長い時間をかけて夜おそくまで練習を重ねたこと。私のためにサポートしてくれたことを思い出しむねがいっぱいになりました。

勝ち負けも大事です。それ以外に、

「一緒にちょうせんすること」

「見守ってくれる人がいること」

は私にとって大きな自信と力につながるということがわかりました。

今回、空手を通して感じた家族の絆は、これからもずっと私の中に残り続けると思います。私たち家族には、私のベスト32と家族ナンバーワンで賞をあげたいです!! 私は、これからも家族と歩んでいきます。

広島市立緑井小学校

6年 大瀬戸

優

私の祖父と祖母は今病気のため入院をしています。祖父は手足がふるえて人の助け、サポートがないと生活ができません。祖母は毎日ご飯を食べる前に注射を打たなくてはならず、今手術をするために体力をつけたり、体調管理を一しょうけん命がんばっています。

私はこの二人が病気だと知った時、とてもおどろいたし、ショックでした。いつも元気に遊んでくれていたし勉強も教えてくれていたからもうそんなことできないのかなと悲しかったです。けれどお見まいに行くといつも

「来てくれてありがとう。」

といつも笑顔でむかえてくれてとても安心します。

でも私が初めて祖母のお見まいに行った時、祖母は静かに泣いていました。そうとう病氣しんどいんだなと思って私も泣きそうになりました。

私の両親と祖父や祖母は病気についてなどの話をよくしています。正直自分はそんな複雑な話は分からなくて、いつも見ているだけになっています。だけどそれではなんだか自分が何もしていないような感じがして、私には何ができるのかなと考えてみることにしました。そして二人に手紙を書こうと決めました。

祖父と祖母一人ずつにぎっしり手紙を書きました。そして私の小さなころの写真や修学旅行の写真などと一しょにわたしました。

すると二人ともとても喜んでくれました。祖母は病室のベッドのまぐらのそばにかざってくれました。私は思いのこもったプレゼントをしてよかったなと心から思いました。

他にもお見まいに行く時は、できるだけあく手をして元気づけたり、祖父の車いすをおしたり、くつをはくのを手伝ったり、自分にできることをたくさんしました。そのおかげで祖父や祖母だけではなく、両親やまわりの人にも喜んでもらえるようになりました。人のためにしたことは、みんな見てくれてるんだと感じてとてもうれしかったです。

今家族一体になって二人の入院生活をサポートしていて、今一番つらい祖父と祖母が少しでも元気に退院できるようにみんなでがんばっています。私も子供だけど、自分にできることをして、家族を支えられるようにど力していきたいと思います。

竹原市立竹原西小学校

6年 糀谷 奏人

家庭の日について調べてみると、子どもや家庭を社会全体で支える大切さについて理解を深めてもらうため、内閣府にて平成19年度から11月第3日曜日を「家庭の日」と定めたそうです。令和5年4月からは、子ども家庭庁がこの期間を中心に広報やけい発を行っていることがわかりました。ぼくはこの取り組みを知って、「家庭の日」について考えるようになりました。ぼくは家庭の日を意識して、この夏休みに自分ができるお手伝いを増やしていきたいと思いました。

まずは、いつもぼくのためにご飯を用意してくれる家族のために夕ご飯作りを手伝うことにしました。メニューはオムライスです。料理はあまり得意ではないけれど、家族が応えんしてくれたのでがんばってみることにしました。

まず、玉ねぎを切るところから始めました。包丁を使うのは少しこわかったけれど、お母さんや家族に助けをもらい、だんだん自信がついてきました。

次に、とり肉とたまねぎを炒めて、ケチャップライスを作りました。とてもいいにおいが広がってきました。ご飯と具材を混ぜるのは力がいったけれど、うまくできたので、とても達成感がありました。

最後に、卵を焼いてケチャップライスにかぶせました。卵が破れないようにそっとのせるのが難しかったけれど、人数分を作るうちにだんだん上手にできるようになりました。

できあがったオムライスをテーブルに出すと、家族みんなが「おいしそう！」と笑顔になりました。お母さんは「助かったよ、ありがとう。またお願いするね。」と言ってくれました。家族もみんなおいしかったとほめてくれました。その言葉を聞いて、ぼくはとてもうれしくなりました。お手伝いって、ただ作業をするのではなく、家族のために働くことなんだと感じました。

そのとき、ぼくは気づきました。毎日のご飯を作ってくれるお母さん、毎日会社で働いて疲れているのに色んなことを手伝ってくれているお父さん、学校に送り出してくれる家族の行動は、全部「当たり前」ではないということです。ぼくが何も言わなくても、いつもやってくれていることは、家族がぼくのことを思ってしてくれていることなんだと、心から感じました。

それから、ぼくは、「もっと色々なお手伝いができるようになりたい。」と思うようになりました。料理だけでなく、洗たく物をたたんだり、食器を洗って片付けたり、できることはたくさんあります。最初は時間がかかったり、うまくできなかつたりするかもしれないけれど、少しずつ覚えていけば、きっと家族の力になれると思います。

これまで、ぼくは「自分のためにがんばること」が多かったけれど、家庭の日を通して、お手伝いをするのは「誰かのために働くこと」だと気づきました。家族が喜んでくれる姿を見て、ぼくの行動が人の役に立つことを知り、心が温かくなりました。

これからも、ぼくが家族のためにできることを見つけて、少しずつでも行動していきたいです。そして、自分のためだけではなく、家族や周りの人達のために動ける人になりたいです。そうすることで、もっとやさしい気持ちで毎日を過ごせるようになると思います。

東広島市立八本松中学校

1年 児 玉 明 莉

私は最近家族との触れ合い、家族との時間が少ない気がします。これまでは休みの日には動物園や水族館、ボウリングや買い物など家族で出かけるのが普通でした。いつもなら時間がなくても食事くらいは一緒にできていたのに、最近は家族全員でご飯を食べられることが少なくなってきました。いつもの食事は私と、弟それから母の三人でご飯を食べることが増えていきます。父は仕事が忙しく、8時くらいに帰ってくるが多くなっています。いつもはみんなで食べることが当たり前で気にしていなかったけれど、一人いないだけで少し寂しいです。また、休みの日でも私の部活があったり、弟の習い事の練習があったりと、出かけるタイミングが合わないことも増えました。だから、中学に入ってからには特に家族の時間が減っているのが実感できます。

また、父と母がつかれていたり、私がつかれていたりもして、出かけるきっかけがほとんどありません。

そこで、家族との時間をとるために最近始めたのが、「寝る前に父と母の部屋に行って一緒に過ごす」ことです。その日にあった出来事や、面白かったこと、困ったこと、大変だったことなどを話しています。話してみるだけでも楽しいし、落ち着きます。特に話すことがなくても、腕立てや腹筋など筋トレを一緒にしてみたり、腕相撲をしてみたり、少しの時間でも一緒に何かをするだけで心が楽になります。私はそんな時間が大好きです。そしてまた明日頑張ろうという気持ちで布団に入れます。

それに家族との時間がなくても頑張って工夫することさえできれば、家族との時間を作ることができるとこの経験から分かりました。このような出来事から、家族の時間はとても大事なことなんだということも改めて分かったし、家族と一緒にいられるのは当たり前ではないことが改めて分かりました。だから、家族の時間を作るために、これからは、手伝いをすることで母や父の負担が少なくなって、家族の笑顔がもっともっと増えれば良いなと思います。

ですから、皆さんも家族がいることが当たり前でないことをみんなに伝えてほしいです。

尾道市立美木中学校

1年 佐藤 劉 弥

僕は4兄弟の一番下で、中学1年生です。うちの家は母子家庭で、お母さんが女手ひとつで、お姉ちゃんと僕達二人の弟を育ててくれています。お父さんはいないので、家のことも生活のことも、全部お母さん一人でやっています。時々そのことを考えると、お母さんは本当に大変だろうなと思い、感謝の気持ちでいっぱいになります。

お母さんは毎日朝早くから仕事に行き、帰ってきてからも、休むひまもなく家のことをしてくれます。ごはんを作ってくれたり、洗濯をしてくれたり、学校で必要なものを用意してくれたりします。夜遅く帰ってきて「おかえり」「今日はどうだった?」と声をかけてくれるので、疲れているのにすごいなあと思います。僕達にとって、お母さんはとても大きな存在です。

でも、正直に言うとさびしいこともあります。友達が「お父さんとキャッチボールした」とか「家族で旅行に行った」と話しているのを聞くと、うらやましくなることがあります。僕も一度は父親と野球をしてみたいと思います。でも、そんな気持ちが出て来た時には「お母さんは一人でがんばってくれているんだ」と思い出すようにしています。そうすると、さびしい気持ちは少し小さくなっていきます。

僕は、お母さんの助けになりたいと思っています。家では食器を片づけたり、洗濯物をたたんだりするようにしています。少しのことでも「ありがとう、助かるよ」と言ってくれるので、もっとがんばろうという気持ちになります。学校でもしっかり勉強して、将来はお母さんに楽をさせられるような人になりたいです。

お姉ちゃんも家のことをよく手伝ってくれます。勉強を教えてくれたり、一緒に弟達の面倒を見てくれたりします。上にお姉ちゃんがいるのは、心強いなと思います。そして、真ん中の兄も、時々けんかはするけれど、三人で協力すれば、お母さんを少しでも楽にできるんじゃないかと思っています。兄弟がいるからこそ、力を合わせられるのだと思います。

僕は、家族の形は人によって違っていいと思います。父親がいなくても、母親と兄弟がいれば十分に幸せだと感じています。もちろん辛いことやさびしいこともあるけれど、それ以上に「ありがとう」という気持ちでいっぱいです。

将来の夢はまだはっきり決まっていませんが、働けるようになったら必ずお母さんを楽にさせたいです。そして「今まで育ててくれてありがとう」と心から伝えたいです。僕にとって家族は、どんな形であっても、大切でかけがえのない存在です。これからもお姉ちゃんと兄と力を合わせて、お母さんを支えていきたいと思っています。

三原市立久井中学校

1年 新越 空

「いつもありがとう。」

これは私がなかなか言うことができない言葉です。特に家族には言うことをためらってしまいます。友達なら簡単に言うことができるのです。このちがいは何なのでしょう。

私は家族の中でも特にお母さんとけんかになってしまいます。でもけんかをする内容はいつも「部屋が汚い」や「物をそのままにして片づけない」といった、私がだいたい悪いことが多いです。でも私はプライドばかり高くて、自分を認めず言い返してしまいます。いつもそんなことばかりです。

以前、いつものようにけんかした日、私は母に向かって「うるさい！」とだけ吐きすてそのままふとんに入りました。その夜はねむれませんでした。私は後悔していたのです。私の母は中国人で、一人で日本にやってきました。母は日本のことを何も知らない、言葉も分からない。そんな状況で三人もの子どもをここまで育ててくれました。お父さんの支えもあったと思うけど、とても苦労したと思います。お母さんは主婦で一緒にいる時間も長かったからこそ言い返してしまうのもあるんだろうなとも思いました。でもそれは言い訳にすぎません。中学1年生になり一歩大人に近づいたからには、言い返したい気持ちをぐっと抑え、ちゃんと話を聞いて、改善することにも努めました。最初は心の隅にイラつきがあったけど、言い返したときよりは少し心が軽くなった気がしました。私はこの感覚を大切にしていこうと思いました。でもそうはいきません。例えば、中学生になり、習い事、自転車通学、部活動、課題など、いろいろなことがあたり前になっていき、つかれてしまう。人間関係が難しくなってしまう。などで忙しいといったことが原因となり家族にあたってしまうのです。

これからは、心が軽くなったあの時の感覚を忘れずに、家族が団らんし、温かい時間が増えるといいなと思っています。そのために中学校でこなさなければならないことを、計画を立て思いつめない程度にがんばることができれば、家族を大切にする第一歩になるのではないのでしょうか。

さらに、中学生になり思春期になる私たちは人間関係が難しくなり、それを家族間で相談し合い、協力し合い、信頼を高めることができます。このように何事もメリットを感じ家族との仲を深めるのも一つの親孝行としてこれからがんばっていきたいです。

広島市立五日市中学校

1年 吉賀 桜

人は生まれ、そして、人は必ず老いていきます。そして、その命のつながりが家族のつながりになっていると私は思います。

私には妹がいます。私が4歳のとき、妹が生まれました。父と一緒に妹が産まれてくるのを、母の側ですっと見守っていました。妹が生まれた瞬間、とても温かくて、小さな小さなその命を優しく守っていかないといけないと思ったのを覚えています。命が生まれる瞬間に立ち会えたことは、私の人生の中でとても貴重な経験だったと思います。

そして、私には大好きなひいおばあちゃんがいます。私が幼い頃は、ずっとひいおばあちゃんと、お化粧ごっこをしたり、手遊び歌で、一緒に遊んだり、私が困っていてもいつも助けてくれていました。ひいおばあちゃんに会うのがいつも楽しみでした。でも、今、そのひいおばあちゃんも96歳になり、一人では歩けなくなり、トイレも、祖父や祖母の介助がないと行けません。おむつもしています。そんな、ひいおばあちゃんを見たとき、悲しい気持ちになったけど、でも、私が小さいときにしてもらったことを、今度は私がしてあげる番だと思いました。

一緒に、髪の毛をとかしてあげたり、トイレに行くときには、手をつなぎ側にいてあげたり、お話をたくさんしたり…。

そのときに私は、生きているということの意味が少し分かった気がしました。

妹が産まれたとき、私が幼少期ひいおばあちゃんと遊んだり、ひいおばあちゃんに助けてもらっていたとき、そして、今、ひいおばあちゃんの側で少しでも役に立ちたいと思っている自分がここにいること――。

それこそが、命のつながり、そして、家族のつながりなのだと思います。

妹が産まれなければ、小さな小さな命の大切さを知ることができなかつたし、ひいおばあちゃんがいなければ、人が老いていくことや、でも、その老いに対して、今度は周りの誰かが支え、助け、そのひとつの命を守っていくことの大切さを知ることができませんでした。

人は産まれて、人は必ず老いていきます。私も、いつかは、きっと、誰かに助けてもらわないと生きてはいけないはずです。

でも、それが、家族がつながっていく、バトンを渡していくことなんだと思います。

生きているということ…。それは、今日も誰かのために、誰かの力になれるように、愛情をもって、つながっていくことだと私は思います。

呉市立東畑中学校

1年 見 口 雄 哉

僕は昨年、人生で初めて家族との別れを経験しました。

それは小学校の卒業式を終えた夜のことでした。祖母からの電話で、ひいおばあちゃんが亡くなったことを知りました。前日まで体調も安定していると聞いていたので、卒業式の次の日に、卒業証書を持って中学校の制服姿を見せに行く予定でした。ひいおばあちゃんが亡くなったということを受け入れられないショックで、その日は全く眠ることができませんでした。

翌朝、ひいおばあちゃんの顔を見に行きました。顔を見ると、いろいろな思い出がよみがえってきました。立ち上がるのが大変な時でも、僕たちが会いに行くと、歩行器を使いながら玄関まできてくれたこと。家が近かった頃は、毎日散歩で僕の家まで歩いてきて、休憩していたこと。誕生日やお正月は必ず一緒に過ごしていたこと。耳が遠いひいおばあちゃんとホワイトボードを使いながら話していたこと。辛くて寂しくて涙が止まらなかったけれど、お礼を伝えられるのは今しかないと思い、卒業証書をひいおばあちゃんに見せながら、これまでの思いを伝えました。

他の人も、ひいおばあちゃんの顔を見に来ていました。順番をゆずるために一旦そばを離れたけれど、出来るだけそばにいたいという気持ちが湧いてきて、何度も何度もひいおばあちゃんのところへ戻りました。思いを伝えれば伝えるほど、寂しさが増してきて、また涙が止まらなくなってきました。その時、お坊さんが声をかけてくれました。

「亡くなった人の思い出話を一つすると、1枚花びらが舞うんです。その花びらはとてもいい香りがするんですよ。だから、これからも思い出話をたくさんしてあげてくださいね。」その言葉を聞いて、思い出話をすることで、ひいおばあちゃんは僕たちの心の中で生き続けるのだと分かりました。そう思うと、少しだけ寂しさが和らぎ、心が楽になりました。

お葬式が終わって、出棺の時がきました。ひいおばあちゃんの棺を担ぐことに少し抵抗があったのですが、僕が棺を担げるくらい大きくなったことを伝えるため、勇気を出しました。最後、成長した姿を見て、きっとひいおばあちゃんは喜んでくれたと思います。

ひいおばあちゃんとの別れ以降、一緒に食べた思い出のお菓子を見かけると、買って仏だんに供え、手を合わせるようになりました。大切な人との別れを経験することで、家族と過ごせる時間も当たり前ではない、と気づきました。いつ終わりが来るかわからないからこそ、後悔のないような毎日を送ります。

ひいおばあちゃん、僕はこれから、何気ない日常を大切にしていこうよ。家族に思いを伝えていこうよ。そう思えたのは、ひいおばあちゃんのおかげだよ。ありがとう。

東広島市立磯松中学校

2年 岡田 煌生

ぼくの家族は4人です。お父さん、お母さん、お兄ちゃんとぼくで、ぼくは、家族の中で一番年下です。

ぼくが一番すごいと思っているのは、お兄ちゃんです。お兄ちゃんは、運動が大好きで、小学5年のときからソフトボールをしていました。足が速くて、毎年運動会のリレー選手にも選ばれていました。

中学校では野球部に入っていました。

でも、そんなお兄ちゃんが中学1年のおわりごろ、急に、「気持ちが悪い、頭が痛い」と言い出し、ご飯がほとんど食べられなくなりました。体重が5キロ減って、寝てばかりで、家から出られなくなりました。がんばって病院に行っても、なかなか原因がわかりませんでした。

お母さんもお父さんも、とても心配していました。お兄ちゃんが寝たままだと、とても静かでさみしかったです。ずっと「早く元気になってほしい」と思っていました。

そして、中学3年生の9月になって、やっと「脳せきずい液ろうしゅつしょう」という病気だとわかりました。尾道の病院で、10月にけんさ入院、12月に手術をして、帰ってきましたが、それからもほとんど2階の部屋で寝たままでした。

すごいなと思ったのは、お兄ちゃんは2月に一つだけ高校を受験しに行ったことです。そこから少しずつ外に出られるようになり、卒業式にも出ることができました。歩いているお兄ちゃんを見て、ぼくは泣きました。

高校では、また野球部に入りました。

朝は6時10分に家を出て、電車に乗って朝練に行きます。夕方の練習が終わって帰ってくるのは、夜の7時半ごろです。とてもたいへんそうだけど、お兄ちゃんがんばっています。野球ができるようになって、うれしそうです。

家に帰るとすぐにお弁当箱を出して、ユニフォームを洗って洗剤につけて、くつやグローブの手入れもします。お風呂に入ってご飯を食べて、あっという間に寝てしまいます。練習がお休みなのは火曜日だけです。

お兄ちゃんは、ぼくにはちょっときびしいけれど、ぼくはお兄ちゃんが大好きです。やっと元気になってうれしいけど、「サッサと動け!」とおこられないように、ぼくも気をつけて、がんばらないといけないなと思っています。

ぼくの家族は、だれかが困っているときには、みんなが助けてくれます。

お兄ちゃんの病気のときも、家族みんなで助けました。ぼくも、自分にできることをがんばって、家族を助けたいです。

三次市立塩町中学校

2年 栗本 夏鈴

「どうして伝えられないのだろう。」

と、私はとても悩んでいる時期がありました。

私は人に感謝の気持ちを伝えることが、あまり得意ではありません。だから、相手に不快な思いをさせてしまっていないかと不安に思うことがあります。

私には今、一番に感謝を伝えたい人がいます。それは、いつも遠いところまで送迎と、サポートをしてくれる両親です。私はバスケットを習っているのですが、自宅から少し離れている所に通っています。試合などがある日は、もっと遠く離れたところまで行きます。早起きする日も多いのですが、そんな日は睡眠時間が特に短いので、両親の疲れがしっかりとれているか心配になることがあります。それでもいつも応援してくれたり、アドバイスをしてくれたりする両親が大好きです。私は、両親に対してたくさん感謝を伝えていきたいなと思いました。しかし、実際に親に「ありがとう」と感謝を伝えようとすると、何だか照れくさくて言えませんでした。どうして「ありがとう」の一言くらい言えないのだろう、とずっと悩んでいました。しばらくたったある日、兄が

「母ちゃんありがとう。」

と、自然と口から感謝の言葉がでていているのを見ました。あまりにも自然だったのですが、その一言で母が

「ええよそのくらい。」

と、少しほほえみながら言っていました。なぜあんなにも自然に感謝が伝えられるのだろうと、少しうらやましく思いました。どうしたら素直にありがとうと言えるのかなと思っていると兄が「どしたん？」

と、聞いてきました。私は、

「どうしたら兄ちゃんみたいに自然と感謝が伝えられるん？」

と、兄にきいてみました。すると少し顔をゆるめて、

「相手の目を見て、リラックスしていたら自然と言葉にでると思うよ。」

と、言われました。私は早速試してみようと思いました。夜、皆でごはんを食べているときに、私は、

「お母さん、お父さん、いつもありがとう。」

と、二人の目を見ながら言いました。すると「どういたしまして。お父さんとお母さんはずっと応援してるから、自分の夢に向かってこれからも頑張ってるね。」

と、言ってくれました。

私は、感謝を伝えたら相手だけではなく、自分もうれしくなるんだなと分かりました。これからは父と母、そして兄に感謝の気持ちを持って夢に向かって進んで行きたいです。

海田町立海田中学校

2年 中 田 美 鈴

私は、家族が6人います。父、母、祖母、兄、姉、自分です。そんな大切・自慢の家族を紹介します。

一番、運転番長の父です。父はトラック運転手で、県外にたくさん行っている所以近道も渋滞しそうなところもほとんど頭に入っています。特にすごいのは、運転技術です。細い道だろうとせまい駐車場だろうとぐんぐん進みます。私は父みたいな人と結婚したいと思っています。

二番、料理番長の母です。毎日家族のことを考えて献立を決めてくれます。栄養バランス、皆の気分、食べたい物を一人で考えて作ってくれるかっこいい母です。私は今、母の弟子として頑張っています。

三番、聞き手番長の祖母です。私が学校から帰ってきて、嫌なことがあったときなどにたくさん静かに私の話を聞いてくれます。とくに反論などをされることもないので、私の気持ちもすぐ落ち着くことができます。

四番、相談番長の兄です。兄は怖いように見えるけどとても優しい人です。私が思っている友達についての悩み事を聞いては、自分の意見、アドバイスを山のように言ってくれるので、私はそれを使って友達との接し方を変えることができました。兄にはとても感謝しています。

五番、情報番長の姉です。姉と私はあまりお喋りしなかったのですが、最近姉の推しだったり、新作スイーツの情報をたくさん教えてくれます。女子同士で、話が合わないこともあるだろうけど、姉とはいろんな場所を旅行したいです。

私は恥ずかしいので、家族に書いたこと、思っていることを伝えたことはないですが、作文を書くとき2枚や3枚では足りないほど家族の長所、短所を知っています。私はこれから家族の長所も短所も愛せる大人になっていきたいです。

呉市立昭和中学校

2年 本 廣 佑 都

僕の祖父母は、若い頃から一つの夢がありました。それは、『海に面した場所に、年をとっても遊べる小屋が欲しい』というものです。二人はよく気になる場所へドライブに出かけていて、僕も幼い頃から連れていってもらっていました。しかし、理想の環境、アクセス、予算的な面で夢は叶えられずそのまま何十年も…。そして、祖父は傘寿を迎えました。

そんな中、昨年運命の出会いが訪れました。日頃から「二人の大事な夢はもう家族の夢」と話していた母が、たまたまインターネットで条件にぴったりの小さな家を見つけたのです。早速、家族みんなで行き、周りを散策した後にその場で多数決。満場一致で欲しいと手を挙げました。ふと祖父母の方を見ると、二人の目はとてもいきいきとしていました。

その家は3年ほど誰も住んでおらず、物もあふれていましたが、毎週のように家族で通って片付けました。また、デッキが海風で朽ちており、いつこわれてもおかしくない状態だったので、親戚にも手伝ってもらいながらDIYで補強していきました。

3か月ほど経った頃、ようやくみんなが快適に過ごせる場所になりました。そこからいよいよ祖父母念願の海遊びの始まりです。春は海岸を散歩したり、山桜を眺めながら花見をしたり。夏はもちろん海水浴。祖父が育てたスイカを持って行き、砂浜でスイカ割りもしました。秋は遠くの山が一齐に色づいて、海と紅葉のコントラストも楽しみました。そして冬は、漁業権がかかっていない近くの海辺で岩ガキやワカメを採り、家族みんなで食べました。一年を通して釣りも楽しめ、春夏秋冬、様々な発見と体験で僕たちを楽しませてくれます。

この春、初めて海の家で一泊しました。近くのカフェで晩ご飯を食べ、温泉施設でゆっくりとお湯につかり、海の家に戻りました。波音と共に眠りにつき、波音と共に目覚めたのは、僕はもちろん、祖父母も生まれて初めての体験でした。海を望みながら食べた、母特製コロケパンの美味しさも特別な思い出です。

「あと10年若い時にこの場所に出会えとったらねえ。」

帰り道の車の中で祖母がぼそっと言いました。となりの祖父も静かに頷いています。僕は、

「何を言っとるん。まだまだ元気なんじゃけん、どんどん楽しもうや。」

と明るく言いました。祖父母が高齢なので、今は父や母が運転していますが、大学に入学したら、車の運転免許を取って、今度は僕がみんなを海の家へ連れて行ってあげたいと思います。

それまでも何度も訪れて、家族で色々な体験をして思い出を重ねていき、祖父母から始まった夢を紡いでいきたいです。

三原市立久井中学校

3年 賀上 敦斗

あなたにとって「家庭」とは何ですか。家族と過ごせる場所でしょうか。それとも、笑顔あふれる安らぎの場所でしょうか。このように人によって「家庭」とは心を安らぐ場所であったり、家族と過ごせる場所だと想像できると思います。では、僕にとっての家庭とは一体どのようなことなのでしょう。それは、家族と過ごせる幸せな空間のことです。

僕の家庭は、特別に変わっているわけでもありません。けれど、毎日の食卓には家族の会話と笑顔があり、学校や運動後で疲れて帰ってきたときには「おかえり」と迎えてくれます。何気ない日々の積み重ねが、僕の心の温もりを作ってくれているのです。でも、そんな家庭の温かさに気づいたのは、ある出来事がきっかけでした。それは、一人で悩んでいたときに、家族が僕の気持ちに寄り添ってくれたことです。

中学1年生の2月、僕はそのときクラブチームでバスケットをしていました。今までは「楽しい」という気持ちがありました。しかし、あるときから、そのクラブチームでの友達関係やコーチのプレッシャーに悩み、皆よりも劣っていて自分だけできないと思うようになってしまいました。そして、朝や昼、夜でも一人で悩むことが多くなりました。そして、食卓では笑顔になれず、食欲も落ちて心の中はモヤモヤしていました。そんな日々が続いていたある日、僕が洗面所に訪れたとき、母がこんな一言を言いました。

「なんか悩み事があるなら言っていよ。」

普段、僕が悩んでいて元気がないことに気づき、母はこんな言葉をかけてくれたのだと思いました。僕はこの言葉を聞いたとき、胸がいっぱいになり心の中で涙がこぼれ落ちました。そして、一人で悩んでいたときに書いていたメモを渡しました。僕は、最初から怒られるという覚悟で返事を待っていましたが、メモを読んでいたとき、母は思わぬ感情を表現させました。母は泣いたのです。僕が心の中でこぼれた涙を表しているかのように。そして、僕のこの思いを否定せず、優しく励ましてくれました。この後、家族全員と相談しましたが、母と同じように誰もこの思いに否定する人はなく、僕の気持ちに寄り添って考えてくれました。このときから、自分の気持ちに一番寄り添ってくれるのは家族なんだと知り、家族がいる幸せを感じる体験になりました。

皆さんも今の当たり前にある家庭を大切にしてください。自分のことを一番に考え、寄り添ってくれる家族を大事にしてください。そうすれば、家庭がある、家族がいる日々が幸せに思えてくるはずですよ。

東広島市立八本松中学校

3年 平田 帆 奈

私には、知的障害を持った兄がいます。知的障害とは、知的機能の障害によって、日常生活などに影響が出る障害のことです。例えば、箸の使い方がわからなくて一人で食事ができなかつたり、トイレに行くことやお風呂に入ることができなかつたりします。なので兄のそばにはいつも父や母がいて手助けをしなければいけませんでした。私がまだ小さかったときはそんな兄がかわいそうだと思っていたし、父や母も毎日起きてから寝るまで兄の手助けばかりでたいへんそうだなと思っていました。

私が小学校高学年になったとき、夏休みに母の仕事の関係で留守番をすることが多くなりました。留守番は兄と私の二人だけでしていました。母がいない2時間の間、私は一人で兄の面倒をみなければいけませんでした。兄はずっと奇声をあげたり、部屋の中を歩き回ったり落ち着きがなくてうるさかったし、話しかけられても何を言っているのか、何をしてほしいのか分からなくて困っていました。何度か留守番をするようになってから、兄がけいれんするようになりました。私は、いつも父や母が兄を支えたり、周りの物をどけたりしているのを見ていました。なので、一人の時でも兄がけいれんした時の対応が自然とできるようになりました。それから、母にたくさんのことを教えてもらって、ご飯を食べさせたり、薬を飲ませたりすることができるようになりました。

中学生になってからは、兄と二人で留守番することも増えていきました。お菓子をあげたり、一緒にアニメを見たりするとき、笑ってくれるようになってとてもうれしかったです。

小学生だったころの、起きてから寝るまで兄の手助けばかりでたいへんそう、という気持ちはもうほとんどなくなりました。今では父や母と一緒に兄の面倒を見て、留守番をするときも、兄がけいれんしたときも、自分がしなければいけないことを探したり、寄りそったりすることができるようになりました。私は、兄のおかげで、ほかの人よりも周りを見て適切な行動をする力や、人のためにできることを見つけて、気配りできる力が身についたと思います。これからの生活でも、兄を通して学んだたくさんのことを活かして今よりもっと周りに優しくできる人になりたいと思いました。

特選

広島市立井口小学校

2年 秦 彬 乃



みんなでぐをいれたりころころしてたべた。

入選

竹原市立竹原西小学校 1年 片田千智



おやすみのひにかぞくであそんでいるところ。

家ぞくで行った花火がすごくきれいだった。



広島市立亀崎小学校 2年 平尾柚乃

大崎上島町立東野小学校 2年 望月章宏



じいちゃん 덕분에カブト虫をつかまえたよ

広島市立楠那小学校 3年 松尾知弥



コアラの家ぞくとぼくたち家ぞくで遊んだよ

家族みんなで田植えのお手伝いをしました。



広島市立狩小川小学校 4年 佐伯梨菜

## 令和7年度「家庭の日」作文・図画募集要綱

- 1 趣 旨 健全で明るい家庭は、家族みんなで話し合い、家族みんなで楽しみ合い、家族みんなで力を出し合うことによって築かれます。  
青少年育成広島県民会議では、毎月第3日曜日を「家庭の日」として定め、明るい家庭づくりの運動を展開しています。  
この運動が広く地域に浸透し、多くの家庭で実践されることを願って、小・中学生が、家族や家庭について日頃思っていることや感じていること、家族と一緒に体験したことなどを作文や図画に表現した作品を募集します。
- 2 対 象 者 県内に在住の小・中学生
- 3 主 催 公益社団法人青少年育成広島県民会議
- 4 後 援 広島県・広島県教育委員会
- 5 協 賛 広島ロータリークラブ、広島南ロータリークラブ、広島東ロータリークラブ、広島東南ロータリークラブ、広島北ロータリークラブ、広島西ロータリークラブ、広島中央ロータリークラブ、広島西南ロータリークラブ、広島陵北ロータリークラブ、広島安芸ロータリークラブ、広島城南ロータリークラブ、広島廿日市ロータリークラブ、広島安佐ロータリークラブ（敬称略、順不同）
- 6 応募方法  
作文  
・400字詰め原稿用紙3枚程度とします。  
・縦書きとし、はっきりと書いてください。  
・題の次に、学校名・学年・名前（ふりがな）を記入してください。  
図 画  
・作品は4つ切りの画用紙とします。  
・描く材料は自由です。（クレヨン、水彩絵の具等）  
・ポスターではないため、標語・タイトルやキャッチフレーズは書かないでください。  
※画用紙に折り紙等を貼り付けないでください。  
・裏面の「図画応募用紙」に記載し、作品の裏に貼付してください。  
作品のコメントも忘れずに記載してください。
- 注意事項  
・一人1点に限ります。  
・本人の作品で未発表のものに限ります。  
・提出された作品は、返却しません。  
・企業名や商号の入った作品は対象外となります。  
・作成指導に当たっては、作品に直接手を加えないようにお願いします。  
・図画は送付時に丸めないでください。
- 7 応募数 作品は応募校で事前審査し、作文・図画それぞれ各学年5名以内で応募してください。なお、作品を書いた児童・生徒全員に参加賞を贈りますので、作品の応募総数を明記してください。
- 8 応募締切 令和7年9月3日（水）必着
- 9 送付先 〒730-8511広島市中区基町10番52号 広島県環境県民局県民活動課内  
（公社）青少年育成広島県民会議 電話082-513-2742/FAX082-511-2173
- 10 審査方法  
(1) 予備審査は作文のみとし、関係行政機関の職員、（公社）青少年育成県民会議職員が行います。  
(2) 事前審査は作文のみとし、学識経験者、関係行政機関の職員、（公社）青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。  
(3) 作文・図画の審査会は、学識経験者、関係行政機関の職員、（公社）青少年育成県民会議職員によって構成する審査員が行います。
- 11 表 彰 特選者は、青少年育成県民運動推進大会において、広島県知事賞の賞状及び賞品を授与します。入選者は、当県民会議会長賞の賞状及び記念品を後日送付します。
- 12 副 賞 特選者は、3,000円の図書カードを贈ります。また、応募者全員に参加賞を送付しますので、必ず応募者の控えをお持ちください。
- 13 そ の 他 入賞作品は、当県民会議発行の入賞作品集や、機関紙「せとのあさ」に掲載するなど広く活用させていただきます。

## 審査員名簿及び審査要領

### ●作文の部審査員

中島 浩一	(公社) 青少年育成広島県民会議常務理事
石田 睦子	三次市教育委員会社会教育委員
佐伯 美香	広島県環境県民局県民活動課長
立田 晃	東広島市立磯松中学校長
福田菜津美	広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事

### ●作文の部審査要領

#### 1 選定方法

- (1) 特選(県知事賞) …… 3 作品
- (2) 入選(会長賞) …… 上位20作品程度を選定する。

#### 2 審査の方法

##### (1) 事前審査

- ・小学校低・高学年、中学生の部をとおして、「家庭の日」の理解度、感銘度、論題にそった論旨、論点の整理、表現力、文の構成等を審査する。
- ・評点は10段階評価とする。
- ・特選を10点満点とし、小・中学生をとおして、特選3作品を選定する。
- ・入選は上位20作品程度を選定する。
- ・学年ごとに平均して選定しなくても良い。

##### (2) 審査会

事前審査の結果をもとに協議し、相互調整して特選、入選を選定する。

### ●図画の部審査員

濱田 昭法	元広島県教育研究会美術部会会長・元広島市教育研究会美術部会会長
佐伯 美香	広島県環境県民局県民活動課長
住田 佳子	広島県教育委員会学びの变革推進部義務教育指導課指導主事
中島 浩一	(公社) 青少年育成広島県民会議常務理事
藤崎 綾	広島県立美術館主任学芸員

### ●図画の部審査要領

#### 1 選定方法

- (1) 特選(県知事賞) …… 1 作品
- (2) 入選(会長賞) …… 5 作品

#### 2 審査の方法

- (1) 作品ごとに、表現力、構成力、家庭の日の理解度等を審査する。
- (2) 候補作品を学年ごとに並べ、審査員は1学年ごとに、5点ぐらい選定する。なお、各審査員同士が同一作品を選定しても良い。
- (3) 候補作品は必ずしも各学年から均等に選ばなくてもよいが、できれば小学校(低・中・高学年)、中学校のバランスを考慮する。
- (4) 審査員が全学年の作品を見た後、(2)で選んだ作品を全部並べ、その中から特選1点、入選5点を協議により選定する。

## 令和7年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

小学校の部		作 文								図 画								応募 総数	参加 人数
番号	学 校 名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	作・ 参加 人数	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	図・ 参加 人数		
1	広島県立黒瀬特別支援学校										5					5	5	5	5
2	大崎上島町立東野小学校										4					4	7	4	7
3	広島市立亀崎小学校										1					1	1	1	1
4	広島市立口田東小学校									2	4	1	1			8	8	8	8
5	三原市立小泉小学校									1						1	1	1	1
6	呉市立宮原小学校													1		1	1	1	1
7	呉市立坪内小学校									1	1	2	1			5	5	5	5
8	竹原市立竹原小学校					1		1	1									1	1
9	広島市立大河小学校											1				1	1	1	1
10	東広島市立寺西小学校		1			1		2	2	3	1	1		3		8	8	10	10
11	広島市立楠那小学校			1		2	1	4	4			1		2		3	3	7	7
12	広島市立五月が丘小学校									1	1		2	1		5	5	5	5
13	東広島市立三永小学校									1		1	1			3	3	3	3
14	廿日市市立平良小学校			1				1	1	1	1	3	1			6	6	7	7
15	福山市立春日小学校			1				1	1		1	2		1	3	7	7	8	8
16	福山市立御幸小学校	2					1	3	3		2	2	1			5	6	8	9
17	竹原市立竹原西小学校			5	5	5	5	20	71	1	2			1		4	8	24	79
18	広島市立井口小学校	1	1			2	2	6	6	5	3	4	4	2	1	19	22	25	28
19	三原市立糸崎小学校	5	5	5				15	79									15	79
20	東広島市立小谷小学校	2		1	1	1	1	6	13									6	13
21	広島市立千田小学校	2						2	3									2	3
22	広島市立緑井小学校				1	1	1	3	5									3	5
23	竹原市立大乘小学校						1	1	1									1	1
24	広島市立狩小川小学校									2			2	1		5	5	5	5
25	広島市立東浄小学校			1	1			2	2	2			1			3	3	5	5
26	庄原市立高野小学校									1		1				2	2	2	2
27	東広島市立西条小学校	2	3	1	2	3		11	11		3	1	1	1	1	7	7	18	18
28	三原市立本郷西小学校									1	1	1				3	3	3	3
29	廿日市市立金剛寺小学校						2	2	2									2	2
	合 計	14	10	16	10	16	14	80	205	22	30	21	15	13	5	106	117	186	322

## 令和7年度「家庭の日」に関する作文・図画応募校一覧表

中学校の部		作 文					図 画					応募 総数	参加 人数
番号	学校名	1年	2年	3年	計	作・ 参加 人数	1年	2年	3年	計	図・ 参加 人数		
1	広島市立井口台中学校	5			5	56						5	56
2	広島市立五日市中学校	5	5		10	70						10	70
3	広島市立長束中学校	5	5	5	15	55						15	55
4	呉市立和庄中学校	5			5	6						5	6
5	広島市立観音中学校		1	1	2	2						2	2
6	呉市立東畑中学校	1	1		2	15						2	15
7	呉市立明德中学校	1			1	1						1	1
8	三原市立第五中学校	4	3	3	10	10						10	10
9	福山市立城北中学校	3	1		4	4						4	4
10	福山市立神辺中学校	1		2	3	3						3	3
11	三次市立塩町中学校	2	5		7	42						7	42
12	東広島市立磯松中学校	5	3	4	12	49						12	49
13	北広島町立豊平学園	2	1	2	5	5						5	5
14	呉市立昭和中学校	5	5	5	15	53						15	53
15	尾道市立美木中学校	4	2	2	8	39						8	39
16	東広島市立八本松中学校	4	5	5	14	42						14	42
17	呉市立天応学園	1	1		2	4						2	4
18	広島市立戸山中学校	2	4		6	6						6	6
19	海田町立海田中学校	5	5	5	15	47						15	47
20	尾道市立尾道みなと中学校		1		1	1						1	1
21	三次市立吉舎中学校	1			1	9						1	9
22	広島市立可部中学校		5		5	21						5	21
23	福山市立鳳中学校						1		2	3	5	3	5
24	廿日市市立七尾中学校	3	3		6	43						6	43
25	廿日市市立四季が丘中学校		1	2	3	3						3	3
26	三原市立久井中学校	1	2	1	4	31						4	31
	合 計	65	59	37	161	617	1		2	3	5	164	622

令和7年度入賞作品集  
「少年の主張」・中学生話し方大会  
「家庭の日」に関する作文・図画

---

発 行

公益社団法人 青少年育成広島県民会議

〒730-8511 広島市中区基町10番52号  
広島県環境県民局県民活動課内

TEL 082-513-2742 FAX 082-511-2173

URL : <https://www.hiro-payd.or.jp/>



# 笑顔生まれる、 元気なあいさつ

おはよう!

広島県の  
青少年のマスコット  
ゆっぴー

さようなら!

こんにちは!

ありがとう!

おやすみ!

